

2023 年度 修士論文

J リーグ発足以降の来日韓国人選手の移籍動機

Reasons for Korean players to play in the J .League

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 健康スポーツマネジメントコース

5023A312-6

愼 武宏

研究指導教員： 中村 好男 教授

目次

第1章 背景.....	1
第1節 Jリーグ30年で増え続けた韓国人選手たち	1
第2節 サッカーの世界ではライバル関係であった日本と韓国	1
第3節 Kリーグの概要	2
第4節 先行研究	3
第5節 研究目的	3
第2章 研究方法	4
第1節 韓国人Jリーガー定量調査.....	4
第1項 調査対象.....	4
第2項 調査方法.....	4
第2節 インタビュー文献調査.....	4
第1項 調査対象者 韓国人Jリーガー40名	4
第3節 現役選手たちへのアンケート調査	6
第1項 アンケート調査対象者と調査期間	6
第2項 調査内容.....	7
第4節 報道記事の文献調査.....	7
第3章 結果.....	8
第1節 韓国人Jリーガーの定量調査.....	8
第1項 韓国人Jリーガーの人数.....	8
第2項 韓国人Jリーガーの統計結果(1993年～2023年).....	9
第2節 4つの時代区分に分けた韓国人Jリーガーの定量分析	10
第1項 第1期(1993年～2002年)の内容分析	12
.....	12
第2項 第2期(2003年～2008年)の内容分析	13
第3項 第3期(2009年～2015年)内容分析.....	13
第4項 第4期(2016年～2023年)の内容分析	14
第5項 時代で異なる韓国人Jリーガーの特徴	15
第3節 文献調査をもとにした「移籍動機」フレーム分析	16
第4節 時代区分別の「移籍動機」の分布と推移	21
第5節 現役選手を対象にしたアンケート調査.....	23
第6節 韓国メディアが報じた韓国人選手のJリーグ進出「文献調査」	24
第4章 考察.....	26
第1節 「アジア枠」の導入が韓国人Jリーガーの増減に影響したか	26
第2節 韓国人Jリーガーたちの「移籍動機」	28

第1項	移籍要因で「年俸への期待」が少なくなったのはなぜか	28
第2項	韓国人選手たちはなぜ「環境的要因」を移籍動機に挙げるのか	34
第3項	プロ・リーグの規模の違いが影響していないか	37
第4項	「スキルアップ」を移籍動機に挙げる心理の根底にあるものは何か	38
第5項	Jリーグへの「憧れ」を語った13歳の韓国少年	43
第5章	結論	45
第6章	補論 韓国人Jリーガーはなぜ増えたのか。その変遷と傾向	47
第1節	「裏切り者」から「愛国者」へ。そして2002年ワールドカップ効果	47
第2節	「Jリーグ経由欧州行き」の始まりと「セカンドベスト」の現実	50
第3節	Kリーグへの反発とJリーグでの現実	52
第4節	韓国メディアが伝えたJリーグ30年の変化	54
第5節	韓国人Jリーガーの意義	56
謝辞		58
参考文献		60

図表目次

図 1	韓国人 J リーガー数の年度別推移	1
図 2	韓国人 J リーガーの年度別推移	8
図 3	韓国人 J リーガー 年度別初来日選手数の推移	9
図 4	韓国人 J リーガー 288 名の統計	10
図 5	韓国人 J リーガー第 1 期の統計と割合	12
図 6	韓国人 J リーガー第 2 期の統計と割合	13
図 7	韓国人 J リーガー第 3 期の統計と割合	14
図 8	韓国人 J リーガー第 4 期の統計と割合	15
図 9	期別フレーム分布	22
図 10	時代別「移籍動機」の推移	22
図 11	現役選手 J リーグ移籍要因アンケート調査結果	23
図 12	時代別「移籍動機」アンケート結果	23
図 13	J リーグ選手数、外国人選手数、韓国人選手数の推移	27
図 14	40 人の文献調査「移籍動機」の推移	29
図 15	K リーグと J リーグの国内選手最高年俸の比較	32
図 16	K リーグ 1 と J 1 リーグの平均年俸の推移	33
図 17	K リーグ、J リーグの 1 試合平均観客数の推移	36
図 18	韓国人選手の主な海外移籍先	46
図 19	東亜日報・朝日新聞 共同世論調査 ワールドカップ共催決定後の日韓関係	50
表 1	韓国人 J リーガーの時代区分	11
表 2	韓国人 J リーガー全 4 期の統計データ	16
表 3	カテゴリー別フレーム分析	16
表 4	選手 40 人の「移籍動機」カテゴリー分類	21
表 5	K リーグ、J リーグ各最高年俸選手及び金額	29
表 6	K リーグ 高額年俸者ベスト 5	30
表 7	日刊スポーツの選手名鑑報道をもとにした韓国人 J リーガー「推定年俸」ランキング	31
表 8	K リーグ、J リーグの最高年俸及び平均年俸の推移	32
表 9	K リーグ 1 と K リーグ 2 の平均年俸の推移	33
表 10	2023 年度の J リーグと J リーグの比較	37
表 11	J リーグ発足以降の日韓戦成績	40
表 12	K リーグと J リーグの規模、ACL 日韓対決成績	41
表 13	2000 年以降の主要国際大会の成績比較	42
表 14	KFA が直近 5 年間に発行した国際移籍証明書発行国ベスト 4	46

第1章 背景

第1節 Jリーグ30年で増え続けた韓国人選手たち

2023年で創設30年を迎えたJリーグでは、これまで数多くの外国籍選手たちがプレーしてきた。1993年から2023年までの30年間で100カ国の選手が来日したと言われており、(公社)日本プロサッカーリーグが2023年2月1日に発表した「Jリーグ選手登録推移2004～2023」でも、のべ71カ国の選手が来日したことがわかっている。

そして、その中で最も多かったのは世界最大のサッカー選手供給国であるブラジル勢。その次に多かったのは、南米の強豪でも欧州の列強国でもなく、アジアの韓国勢だった。

こうした状況について藤田(2013)は「Jリーグにブラジル選手が多い点は主要な欧州リーグと同じであり、韓国人選手の比率が高いのはJリーグならではの特性。サッカーの国際移住において文化的・地理的特殊性も無視できない」としているが、Jリーグに来る韓国人選手が増えたのは日本と韓国が距離的に近く、同じ東北アジアの文化圏にあるということだけではないだろう。

というのも、Jリーグ開幕元年の1993年にJリーグでプレーした韓国人選手はわずか1名しかいなかったのだ。それが10年後には二桁になり、20年後の2013年には60名を突破した。その後、やや減少した時期もあるが、近年は再び増加している。その推移は図1の通りだ。

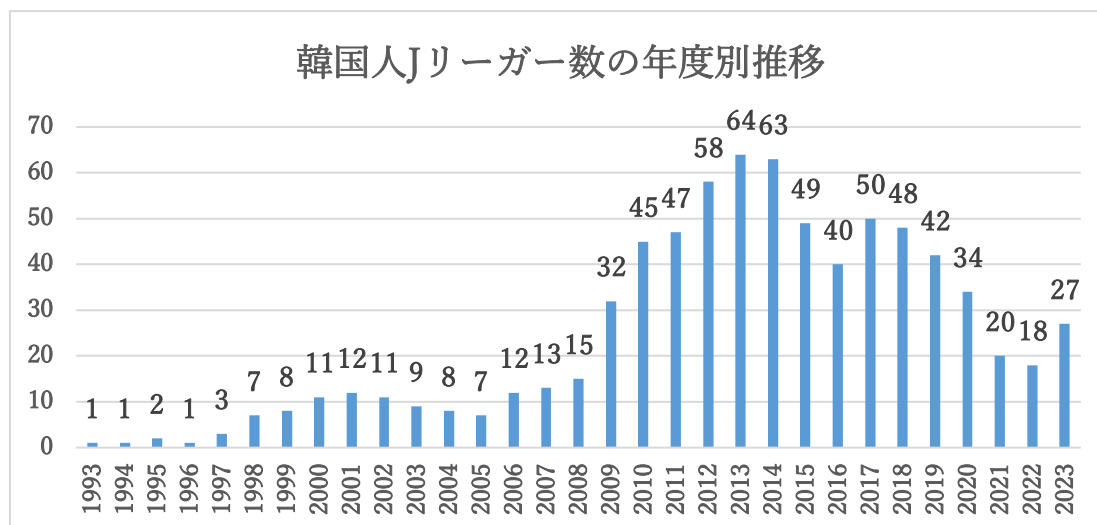


図1 韓国人Jリーガー数の年度別推移

第2節 サッカーの世界ではライバル関係であった日本と韓国

サッカーの世界において、日本と韓国はともに互いを“宿命のライバル”と呼んできた。

初の国家間対決となった1954年スイス・ワールドカップ・アジア予選以降、日本と韓国は代表レベルにおいてワールドカップやオリンピックといった国際大会への出場権をかけて数多くの激闘を繰り広げてきた。

1972年からは両国のレベルアップとサッカーを通じた日韓交流の促進を目的に、双方の

国を行き交う日韓定期戦も計15回開催。大学などのアマチュア・レベルにおいてもしのぎを削りあったが、1990年代前半までは圧倒的に韓国のほうが優勢だった。

A マッチ通算成績がそれを物語る。1954年の初対決以来、日本と韓国は2023年7月まで計81回のA マッチを戦ったが、韓国が大きく勝ち越している。

特に1985年ワールドカップ・アジア最終予選から1991年の第15回日韓定期戦まで、韓国は6連勝した。当時の日本は実業団チーム中心のJSL(日本サッカーリーグ)が主流だったが、韓国では1983年にサッカーのプロ化が始まり、その効果もあって1986年ワールドカップ・メキシコ大会で32年ぶりのワールドカップ出場を果たし、それ以降も直近の2022年カタール大会まで9大会連続でワールドカップに出場している。その快挙を下支えしているのがKリーグであることは、韓国のサッカー関係者の誰もが認めるところでもある。

第3節 Kリーグの概要

Kリーグは2023年12月時点で、1部リーグ12クラブ、2部リーグ13クラブで運営されている。

創設時はプロ2、アマチュア3の複合リーグとして1983年に始まり、名称も「スーパーリーグ」だったが、1987年から特定企業が運営母体となったプロクラブだけでリーグが構成されるようになり、1993年までは6クラブ体制で運営された。

1994年からは毎年のように新チームが誕生し、1996年にはホームタウン制を強化するために各クラブの名称を「地域+企業+愛称」で統一。「プロ・チュック（蹴球）」の呼び名で定着していた呼称が現在の「Kリーグ」に改称されたのは、1998年からだった。

そして2002年ワールドカップ・日韓大会以降、地方自治体の行政機関が中心となって運営する「市民クラブ」が続々と誕生し、兵役対象選手の受け皿でもある国軍体育部隊・尚武（サンム）も参戦。2008年には1部リーグが16クラブ体制になった。

さらに2013年度からは、韓国実業サッカー連盟が運営したナショナルリーグ参加クラブや新設クラブらで構成させた2部リーグをスタート。1部リーグを「クラシック」、2部リーグを「チャレンジ」という名称で区別し、2018年からは1部リーグを「Kリーグ1」、2部リーグを「Kリーグ2」と改めて現在に至っている。

このように国内にプロ・リーグがある状況であっても、韓国人選手たちがJリーグにやってくるのはなぜか。

筆者は1994年からジャーナリストとして活動を始め、主に韓国のスポーツ、その中でも特にサッカーの取材を長く続けてきたが、1997年から韓国人Jリーガーは毎年のように増えていく現場をこの目で確認してきた。

近年、韓国でもサッカー選手の海外移籍が日常化し、その移籍先としてサッカーの本場ヨーロッパはもちろん、同じアジア圏でもある中国・中東・東南アジアに広がるまで多様化しているが、Jリーグは韓国人選手の海外移籍先として常に上位にある。

第4節 先行研究

しかし、韓国人 J リーガーを研究対象にした論文は日本にも韓国にも見当たらなかった。

J リーグにやってきた外国籍選手の研究論文としては『J リーグにおけるサッカー移民の特性と変化』（藤田智博、2013）があるが、同論文は 1993 年から 2011 年までに日本で発刊された選手名鑑をベースにしたデータ分析で、直近 10 年のデータ収集に関してはフォローされていないため、韓国人 J リーガーの全体像は明らかにされていない。

また、韓国には『The Changes of Paradigm in Sport Labor Migration and Its Significance: Focused on Korean Footballers（K リーグ選手たちの海外移籍パラダイムの変化）』（Wangsung, Myung. and Esther, Lee., 2018）があるが、J リーグに渡った韓国人選手に関しては 1993 年から 2001 年までしか言及されておらず、2002 年以降について更新されたものもなかった。

こうした状況を踏まえると、韓国人 J リーガーに焦点を当てて研究を進めることは、日本はもちろん、韓国のサッカー界にとっても意義があると思われる。

第5節 研究目的

なぜ韓国人 J リーガーは増え続けたのか。彼らは何を求めて日本にやって来るのか。本研究では「韓国からどんな選手たちが J リーグに来ているか」を調査・分析したうえで、「韓国人 J リーガーの移籍動機」を明らかにすることを目的とする。

第2章 研究方法

第1節 韓国人Jリーガー定量調査

1993年シーズンから2023年シーズンまでの30年間に、Jリーグでプレーした韓国人選手の特徴と実績を明らかにすることを目的に、以下の内容について調査・分析した。

第1項 調査対象

調査した選手は、韓国で生まれ育った韓国籍選手。日本で生まれ育った在日韓国人選手は含まず、出身地が「韓国」となっている選手のこと。調査内容は移籍年齢、試合出場数などのJリーグ公式記録だけではなく、移籍前の所属先(プロかアマか)、育成年代を含めた代表歴、国際大会出場歴など、社団法人大韓サッカー協会(KFA)で管理する情報も照会して調査した。

第2項 調査方法

Jリーグの公式記録ウェブサイトである『J.League Date Site』で生年月日、ポジション、移籍年度、移籍年齢(生年月日と来日年度をもとに満年齢を算出)、リーグ戦出場記録、在籍クラブなどのデータを集めた。

また、KFA公式ウェブサイトの選手Aマッチ記録コーナーを使って、育成年代を含めた代表歴、国際大会出場歴、移籍前所属先(プロかアマか)などを調査した。

第2節 インタビュー文献調査

本節では第1節の定量調査では表れない選手個々の移籍理由や事情を探るために、筆者が過去に実施した29名のインタビュー記事と、韓国メディアに掲載された11名のインタビュー記事などを対象に、文献調査を実施した。

第1項 調査対象者 韓国人Jリーガー40名

筆者が過去に実施した韓国人Jリーガーのインタビュー書籍『イルボンはライバルか韓国人Jリーガーたちの証言』(2015,SPORTAL KOREA)と、日本で発刊された書籍・雑誌でのインタビュー記事、韓国ウェブメディアでのインタビュー記事などを調査対象とした。

対象者は次の通り。氏名、移籍年度、在籍期間、主なJリーグ所属クラブの順で表記した。

- 1.ノ・ジョンユン/22歳で来日/1993年～2002年/サンフレッチェ広島など
- 2.コ・ジョンウン/31歳で来日/1997年～1998年/セレッソ大阪など
- 3.ホン・ミョンボ/28歳で来日/1997年～2001年/柏レイソルなど
- 4.ファン・ソンホン/30歳で来日/1998年～2002年/セレッソ大阪など

- 5.キム・ドフン/28歳で来日/1998年～1999年/ヴィッセル神戸など
- 6.ハ・ソクジュ/30歳で来日/1998年～2000年/ヴィッセル神戸など
- 7.ユ・サンチョル/28歳で来日/1999年～2005年/横浜F・マリノスなど
- 8.ユン・ジョンファン/27歳で来日/2000年～2002年、2006年～2007年/サガン鳥栖など
- 9.キム・ヒョンソク/33歳で来日/2000年～2001年/ヴェルディ川崎
- 10.パク・チソン/19歳で来日/2000年～2002年/京都パープルサンガ
- 11.チェ・ヨンス/28歳で来日/2001年～2004年/ジェフ市原など
- 12.アン・ヒョヨン/23歳で来日/2001年～2002年、2009年/京都パープルサンガなど
- 13.アン・ジョンファン/26歳で来日/2002年～2005年/横浜F・マリノスなど
- 14.チョ・ジェジン/23歳で来日/2004年～2006年、2009年～2010年/清水エスパルスなど
- 15.キム・ジンギユ/20歳で来日/2005年～2006年、2011年、2016年/ジュビロ磐田など
- 16.チョ・ヨンチョル/18歳で来日/2007年～2014年、2019年/アルビレックス新潟など
- 17.キム・ナミル/31歳で来日/2008年～2009年、2015年/ヴィッセル神戸など
- 18.パク・チュホ/21歳で来日/2008年～2011年/ジュビロ磐田など
- 19.パク・ドンヒョク/30歳で来日/2009年～2011年/柏レイソルなど
- 20.イ・ジョンズ/29歳で来日/2009年～2011年/鹿島アントラーズなど
- 21.イ・グノ/24歳で来日/2009年～2012年/ガンバ大阪など
- 22.キム・ジンヒョン/23歳で来日/2009年～現在/セレッソ大阪
- 23.キム・ボギョン/21歳で来日/2010年～2012年、2015年、2017年～2019年/セレッソ大阪など
- 24.キム・ミヌ/20歳で来日/2010年～2016年/サガン鳥栖
- 25.チョン・ウヨン/22歳で来日/2011年～2015年/ヴィッセル神戸
- 26.オ・ジェソク/23歳で来日/2013年～2020年/ガンバ大阪など
- 27.チョン・ソンリョン/31歳で来日/2016年～現在/川崎フロンターレ
- 28.ファン・ウィジョ/25歳で来日/2017年～2021年/ガンバ大阪
- 29.ナ・サンホ/23歳で来日/2019年～2021年/FC東京
- 30.ク・ソンユン/18歳で来日/2012年～現在/コンサドーレ札幌など
- 31.チェ・ソングン/21歳で来日/2012年～2016年/サガン鳥栖など
- 32.キム・ミンテ/22歳で来日/2015年～現在/コンサドーレ札幌など
- 33.イム・チョンビン/23歳で来日/2016年/ザスパ草津
- 34.キム・スングユ/26歳で来日/2016年～2022年/ヴィッセル神戸など
- 35.イ・ボムヨン/27歳で来日/2016年/アビスパ福岡
- 36.ジョン・チュングン/22歳で来日/2017年～2020年/町田ゼルビアなど
- 37.ベ・スヨン/19歳で来日/2017年～2019年/ガンバ大阪など
- 38.チュ・セジョン/31歳で来日/2021年～2022年/ガンバ大阪

39.クォン・ギョンウォン/30歳で来日/2022年～2023年/ガンバ大阪

40.オ・セフン/23歳で来日/2022年～現在/清水エスパルス

第3節 現役選手たちへのアンケート調査

過去に日本でプレーした韓国人Jリーガーたちの「移籍動機」については、第2節のインタビュー記事の文献調査で分析した通りだが、現在も現役として活躍する選手たちは、Jリーグのどんなところに魅力やメリット(利点)を感じて日本にやってくるのか。アンケート調査を行なった。

第1項 アンケート調査対象者と調査期間

調査対象者は現在、現役のプロ選手として活動し、Jリーグでのプレー経験もある者。期間は2023年12月1日から12月20日までとし、電話やメッセージアプリを使っのアンケート調査を実施して、31名から回答を得た。

以下はアンケート調査に回答してくれた選手31名。氏名、来日年度と主なJリーグ所属クラブの順で表記した。

- 1.ハン・グギョン/2010年来日/湘南ベルマーレなど
- 2.キム・ヨングォン/2010年来日/FC東京など
- 3.キム・ジョンピル/2011年来日/東京ヴェルディなど
- 4.ファン・スンミン/2011年来日/湘南ベルマーレ
- 5.キム・ソンミン/2011年来日/サガン鳥栖
- 6.ペク・ソンドン/2012年来日/ジュビロ磐田など
- 7.キム・ジョンヒョン/2012年来日/大分トリニータ
- 8.イ・グァンソン/2012年来日/アビスパ福岡など
- 9.ハン・ヒフン/2013年来日/愛媛など
- 10.ド・ドンヒョン/2013年来日/FC岐阜
- 11.キム・ヒョヌン/2013年来日/ジェフ千葉
- 12.キム・ソンジュン/2014年来日/セレッソ大阪
- 13.イ・ミョンジェ/2014年来日/アルビレックス新潟
- 14.イ・ヨンジェ/2014年来日/V・ファーレン長崎など
- 15.パク・チャニョン/2015年来日/愛媛FCなど
- 16.パク・ソンス/2015年来日/FC岐阜
- 17.アン・ジュンス/2016年来日/鹿児島ユナイテッド
- 18.ユ・インス/2016年来日/FC東京など
- 19.チョン・スンヒョン/2017年来日/鹿島アントラーズなど

- 20.キム・ドンス/2017 年来日/大宮アルディージャ
- 21.アン・ヨンウ/2017 年来日/サガン鳥栖
- 22.ユン・ソギョン/2017 年来日/柏レイソル
- 23.ゴ・ドンミン/2017 年来日/松本山雅 FC
- 24.イ・ユノ/2017 年来日/ベガルタ仙台など
- 25.イ・ジョンヒョプ/2018 年来日/湘南ベルマーレ
- 26.ユン・イルロク/2018 年来日/横浜 F・マリノス
- 27.ヤン・ドンヒョン/2018 年来日/セレッソ大阪など
- 28.ヨン・ジェミン/2019 年来日/鹿児島ユナイテッド
- 29.イ・ジョンホ/2019 年来日/V・ファーレン長崎など
- 30.キム・ヒョン/2019 年来日/栃木 SC
- 31.パク・ゴヌ/2022 年来日/サガン鳥栖

第2項 調査内容

調査項目は1つの設問を設け、以下にある6つの回答から当てはまるものを選んでもらった。複数回答を可能とし、その場合は最大3つまでとする「複数選択型」で実施した。

Q:あなたがJリーグ移籍を決めた要因は何ですか。以下の6つの中から選んでください。
(複数回答可。最大3つまで)

- | | |
|-----------------|-----------------------|
| 1.スキルアップ(技術向上) | 2.キャリアアップ(代表入りなど) |
| 3.年俸・収益 | 4.環境的要因(施設、人気、システムなど) |
| 5.次善の選択(欧州進出願望) | 6.そのほか |

第4節 報道記事の文献調査

『The Changes of Paradigm in Sport Labor Migration and Its Significance: Focused on Korean Footballers』(Myung & Lee, 2018)ではKリーグ選手たちの海外移住(海外移籍)パラダイムの変化を明らかにするため、報道記事をニュースフレーム分析している。

ニュースフレーム分析とは、特定のニュースや情報を伝える際の視点やフレームを理解し、それに基づいて情報を解釈するための手法で、一般的に形式的フレーム、内容的フレーム、定量的フレームなどで区分される(Iyengar & Simon, 1993)。先行研究では定量的フレーム(年度別の量的報道推移)と内容的フレーム(年度別の支配的談論比較)で実施していた。

本研究では韓国メディアが「Jリーグ進出をどう報じてきた」を定量的フレームで分析し、文献調査した。

第3章 結果

第1節 韓国人Jリーガーの定量調査

第1項 韓国人Jリーガーの人数

図2は(公社)日本プロサッカーリーグが2023年2月1日に発表したJリーグ登録選手数推移をもとに、Jリーグでプレーした韓国人選手数の年度別推移をグラフ化したものとなる。

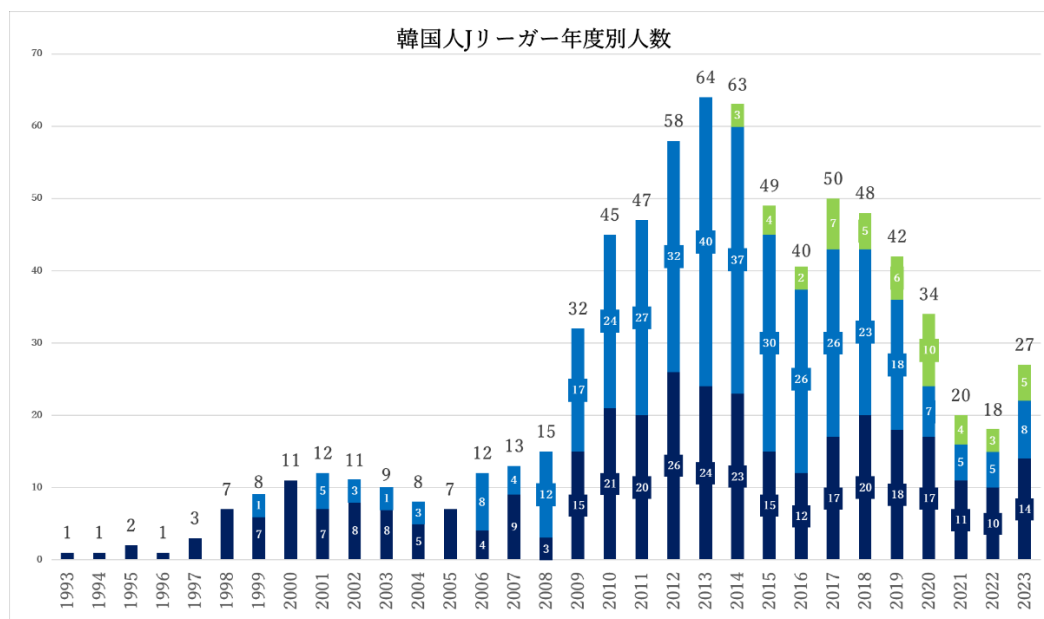


図2 韓国人Jリーガーの年度別推移

Jリーグ開幕元年は1名だったが、1997年から2002年にかけてJリーグでプレーした選手が増えていた。1996年5月31日に日本と韓国が2002年ワールドカップを共同開催することが決まり、1990年以降から日韓交流が活発化し始めるが、それも関係したと思われる。

また、1993年にスタートしたJリーグは、1999年に2部リーグであるJ2リーグを、2014年には3部リーグであるJ3リーグをスタートさせている。図2の濃紺はJ1リーグ、青はJ2リーグ、黄緑色はJ3リーグでプレーした韓国人選手を示した。韓国人選手が特定のレベルだけに集まるではなく、Jリーグ全般においてプレーしていることがわかった。

ただ、同一選手が複数に渡ってJリーグに在籍したり、J1からJ2もしくはJ2からJ1へと戦うリーグ・レベルが翌年に異なっている場合もある。この図に示された年度別線選手の総数が、過去30年間に来日した韓国人Jリーガーの総数にはならない。

そこでJリーグの公式記録ウェブサイト『J.League Data Site』を使用して来日初年度のみをカウントして韓国人選手の年度別推移を調べた結果、1993年シーズンから2023年シーズンまでの30年間に、日本にやって来た韓国人選手はのべ288名だった。その年度別推移をグラフにしたのが、図3である。

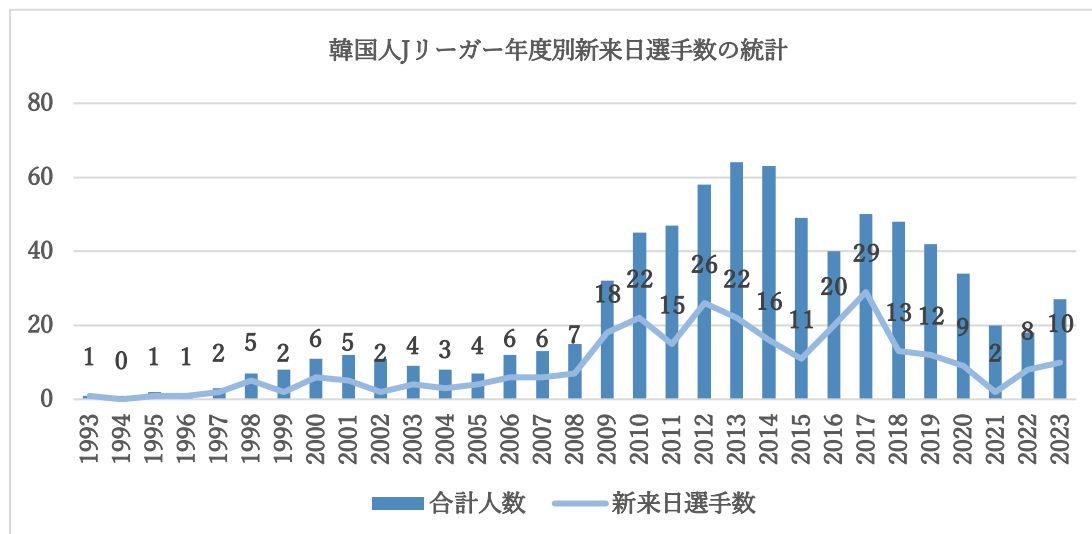


図3 韓国人Jリーガー 年度別初来日選手数の推移

第2項 韓国人Jリーガーの統計結果(1993年～2023年)

そして、この288名の経歴を大韓サッカー協会(KFA)公式ウェブサイト内の「選手別 A マッチ記録」でも調べた。

KFA 公式サイトの「選手別 A マッチ記録」は、国際 A マッチ記録だけではなく、U-16 代表から U-23 代表まで年代別代表への選出経験者もアーカイブされている。

『J.League Date Site』で確認できた288名の選手ひとりひとりを「選手別 A マッチ記録」で検索し、生年月日などで同一人物であることを確認し、各自の代表記録、来日前所属先なども確認した。図4が『J.League Date Site』と「選手別 A マッチ記録」をもとにした韓国人Jリーガーの統計となる。

韓国人Jリーガーの統計（1993～2023年）

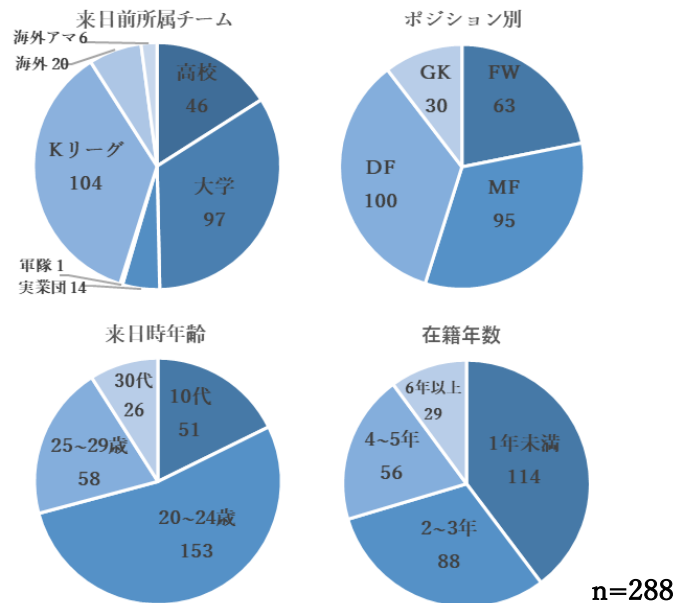


図4 韓国人Jリーガー288名の統計

来日前の所属チームとしてはKリーグが最も多い104名で、それに続くのが大学(97名)、高校(46名)の順となった。さらに海外アマを含めと、149名がJリーグでプロになっていることがわかった。

つまり、全体の半数以上が高校・大学を卒業もしくは中退してJリーグのクラブと契約したアマチュア選手で、当然、来日年齢も若い。10代～24歳の若さで来日している選手の比率は全体の75%に肉薄するほどだ。

ポジションで最も多かったのはDF(100名)。それに続くのがMF(95名)、FW(63名)、GK(30名)となっている。当初はFWとMFが多かったが、次第にDFも増えていき、近年はGKがたくさん来日している。GKに関しては30名中25名が2015年以降に来日した選手であることがわかった。

そして、在籍年数だ。1年未満が最も多い114名だが、2年以上Jリーグでプレーした韓国人選手の割合は全体の60%になる。戦力にならなければ1年で見切りをつけられてしまう厳しいプロの世界で、2年以上もリーグに在籍できている事実が物語るものは多い。韓国人Jリーガーたちが「戦力として計算できること」を示した成果と言えるだろう。

第2節 4つの時代区分に分けた韓国人Jリーガーの定量分析

総合スポーツ雑誌『Sports Graphic Number』は第829号(2013年6月13日号)内の記事「若き3人のコリアンはなぜ“イルボン”を選んだのか。」において、韓国人Jリーガーの移籍変遷を次のように時代区分した。

「盧廷潤(ノ・ジョンユン)が韓国人 J リーガー第一世代とすれば、97 年以降に来日した高正云(コ・ジョンウン)、黄善洪(ファン・ソンホン)、河錫舟(ハ・ソクジュ)、柳相鉄(ユ・サンチョル)、崔龍洙(チェ・ヨンス)らは第二世代と言えるだろう。K リーグで実績を積み、韓国代表の軸でもあった彼らは、高額年俸に加え専任通訳、住居、高級車も用意されるなど、待遇も良かった。ワールドカップ共催の友好ムードもあって、その動向は韓国でも詳細に報じられた。(中略)そして第三世代の朴智星(パク・チソン)が新たな成功例を示す。(中略)。アジア枠導入の 09 年の以降は、代表経験はおろかプロ経験もない選手が大学来日するようになった。若くて無実績の第 4 世代の登場である」(『Sports Graphic Number』第 829 号「若き 3 人のコリアンはなぜ“イルボン”を選んだのか。」)

また、韓国のサッカー専門ウェブメディア『FOOTBALLIST』は 2013 年 11 月 23 日発の「ノ・ジョンユンからペク・ソンドンまで…コリアン J リーガーの足跡」と題した記事内で、「1 期=先駆者ノ・ジョンユン 2 期=コリアン J リーガー黄金期を牽引したホン・ミョンボ、ファン・ソンホン、ユ・サンチョル 3 期=成功的なワールドカップ開催、J リーグラッシュとパク・チソン 4 期=大学生選手たちの J リーグラッシュの始まり」と時代区分をした。

このように時代によって異なる韓国人 J リーガーの特徴の変化を調べるために、本研究では 2 記事を参考に韓国人 J リーガーの時代区分を次のように分類して、データを集計し内容を分析した。

カテゴリー	年代	出来事
第1期	1993年～2002年	93年Jリーグ創設、99年J2開始、02年W杯日韓共催
第2期	2003年～2008年	05年J1が18クラブ体制
第3期	2009年～2015年	09年アジア枠導入、J3開始
第4期	2016年～2023年	19年アジア枠廃止

表 1 韓国人 J リーガーの時代区分

時代区分は、J リーグの組織改編や J リーグを取り巻く環境に影響をもたらす出来事があったかなど、質的变化が考慮して設定した。

例えば第 1 期は、1993 年の J リーグ開幕から始まり 1999 年の J2 リーグのスタート、そして日本と韓国が共同開催した 2002 年ワールドカップまでの期間とした。

そして、2002 年ワールドカップを成功的に終え、J 1 リーグが現行の 18 チーム体制(2020 年シーズンのみ新型コロナウイルスの影響で 20 チーム体制での運営)となった 2005 年を含めた時期を第 2 期とした。

第 3 期のスタートを 2009 年としたのは、このシーズンから「アジア枠」がスタートしたからだ。「アジア枠」とは AFC 加盟国の選手 1 名は、外国人選手枠に含まず登録できるという制度で、J リーグでは 2009 年から導入された。このアジア枠が 2014 年から始まった

J3 リーグにも採用されたこともあって、2015 年までを第 3 期とした。

ただ、そのアジア枠も 2019 年には廃止されている。その前後から現在に至るまでの期間で韓国人 J リーガーの特徴を把握すべく、2016 年から 2023 年までを第 4 期と区分した。

この 4 つの時代区分によって、韓国人 J リーガーのどんな質的特徴を持ち、時代によってどんな変化があったのか、その結果を順に紹介する。

第 1 項 第 1 期(1993 年～2002 年)の内容分析

1993 年に韓国人 J リーガー第 1 号となるノ・ジョンユンに始まり、2002 年に初の高卒選手としてジュビロ磐田と契約するキム・グンチョルまで、25 名が来日した。

そのうち韓国代表経験者は 20 名。また、K リーグの年間 MVP 経験者 5 名(コ・ジョンウン、ホン・ミョンボ、キム・ヒョンソク、チェ・ヨンス、アン・ジョンファン)、ベストイレブン経験者 9 名(コ・ジョンウン、ホン・ミョンボ、キム・ヒョンソク、チェ・ヨンス、アン・ジョンファン、ハ・ソクジュ、ファン・ソンホン、ユ・サンチョル、キム・ドフン)、新人王経験者 2 名(コ・ジョンウン、チェ・ヨンス)、得点王経験者 3 名(キム・ヒョンソク、ユ・サンチョル、キム・ドフン)と、プロとしても一流選手が多かった。

J リーグでもファン・ソンホンが得点王(99 年)、ホン・ミョンボがベストイレブン(00 年)に輝いている。

なお、J リーグでプロになった選手は 6 名、来日後に韓国代表になった選手は 1 名だった。図 5 にあるように K リーグからの移籍が最も多く、ポジションでは MF と FW が多かった。平均在籍年数は 3.28 シーズンだった。

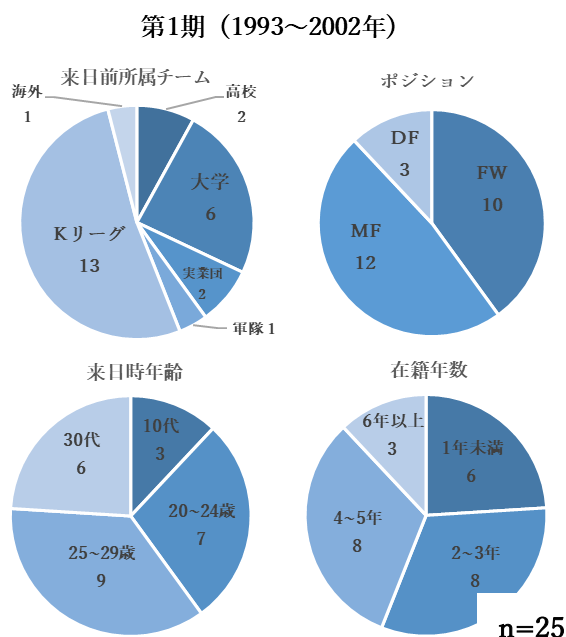


図 5 韓国人 J リーガー第 1 期の統計と割合

第2項 第2期(2003年～2008年)の内容分析

コ・ジョンス(03年)、チェ・テウク(05年)、キム・ナミル(08年)などワールドカップ経験者からU-23、U-20代表の主力格まで、30名が来日した。そのうち韓国代表経験者は10名。また、Kリーグの年間MVP経験者は1名(コ・ジョンス)、ベストイレブン経験者は2名(コ・ジョンス、キム・ナミル)だった。

一方、Jリーグでプロになったのは16名。来日後に韓国代表になった選手は6名だった。

03年にパク・チソン、06年にアン・ジョンファン、08年にオ・ボムソクがJリーグからヨーロッパのクラブに移籍した。08年に来日したパク・チュホも11年にはスイスのクラブに移籍している。Jリーグを経由してヨーロッパに進出する選手が出始めた時期だった。

図6にあるようにKリーグからの移籍と高校・大学からの移籍が同等に近くなり、ポジションとしてはMFが多かった。平均在籍年数は2.97シーズンだった。

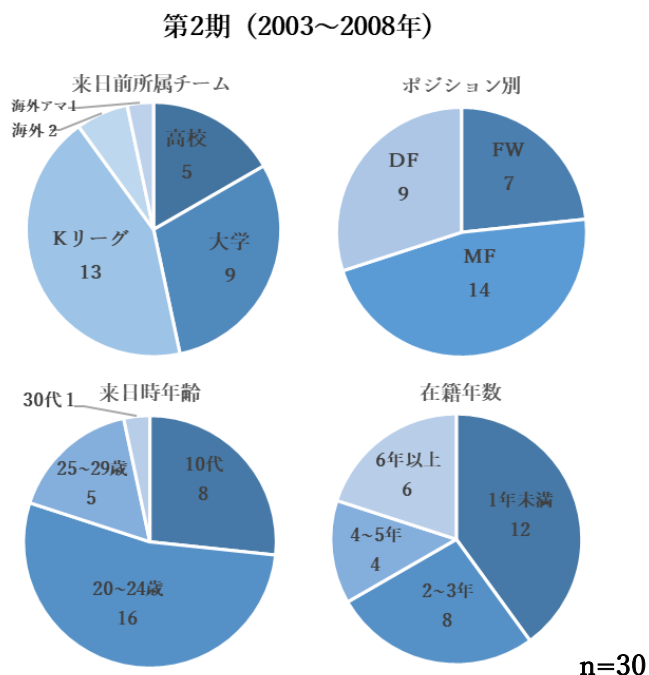


図6 韓国人Jリーガー第2期の統計と割合

第3項 第3期(2009年～2015年)内容分析

130名の選手が来日していたことがわかった。そのうち代表経験者は16名。また、Kリーグでの年間MVP経験者は1名(イ・チョンス)、ベストイレブン経験者は5名(イ・チョンス、イ・グノ、イ・ホ、チョ・ウォニ、キム・チャンス)、新人王経験者は1名(イ・チョンス)と、プロでの実績を持って来日する選手は少なかった。

ただ、U-23代表、U-20代表、U-17代表など育成年代での代表経験者が多く、U-23代表経験者は43名。そのうち16名がオリンピックを経験していた。来日後にA代表に選ば

れている選手が 17 名もいた。

J リーグでプロになったのは 76 名。そのうち 10 名がワールドカップに出場するまでに成長していた。キム・ボギョン、キム・ジンスら欧州クラブに移籍する選手もいた。

図 7 にあるように大学を中退もしくは卒業して J リーグにやって来た選手が多く、ポジションとしては DF が最も多かった。平均在籍年数は 3.09 シーズンだった。

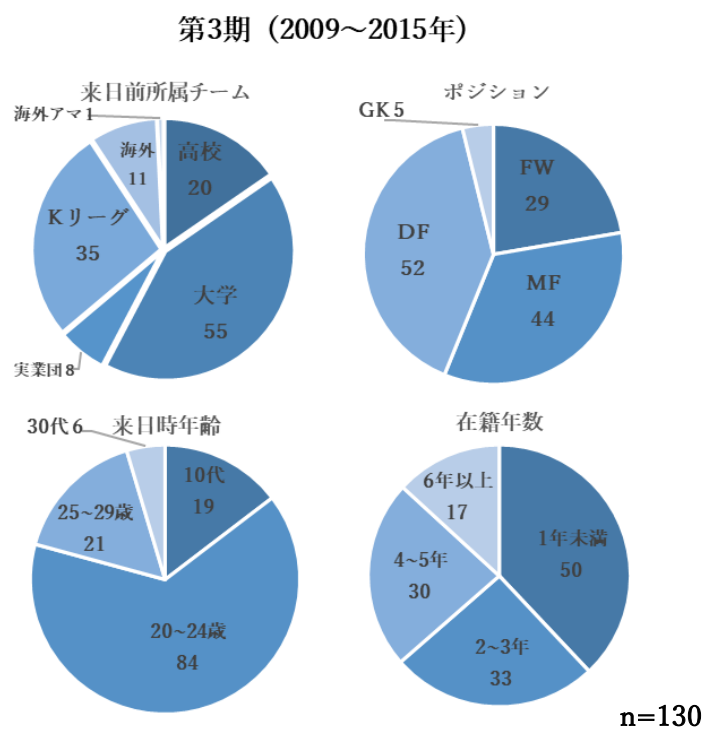


図 7 韓国人 J リーガー第 3 期の統計と割合

第 4 項 第 4 期(2016 年～2023 年)の内容分析

103 名の選手が来日。そのうち J1 リーグでプレーした選手は 32 名で、J2・J3 でのみの選手が 50 名を超えていた。来日前に韓国代表を経験していたのは 19 名。そのうち GK が 4 名と多いのが特長的。ただ、来日後に韓国代表になったのは 1 名しかいない。また、K リーグのベストイレブン経験者は 3 名(ハ・デソン、キム・スンギュ、クォン・スンテ)だった。オリンピックなど育成年代の国際大会経験者の数が少ないのも特徴だった。

第4期（2016～2023年）

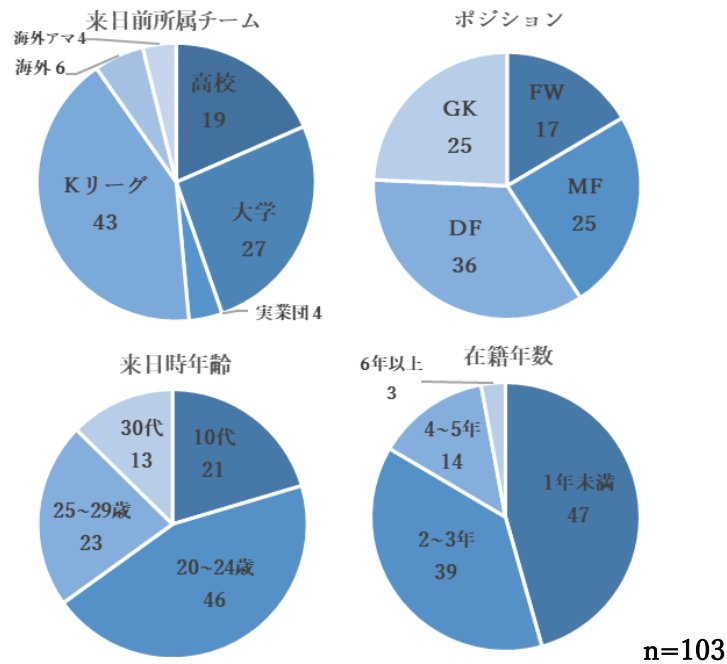


図8 韓国人Jリーガー第4期の統計と割合

第5項 時代で異なる韓国人Jリーガーの特徴

韓国人Jリーガーたちを時代区別別に分類して統計を取ってみると、いくつかの違いがあることがわかった。

まずはその人数だ。第1期、第2期は二桁だったが、第3期から三桁になっている。30年間で288名が来日していたが、そのうち233名が2009年以降の来日だった。

また、第1期ではKリーグや韓国代表などでも活躍した「実績のあるスター選手」が多かったが、第2期から次第に大卒選手が増えていき、第3期になると高卒や大学を中退して日本でプロになる選手が70名以上もいたことが明らかになった。

当然、来日前から代表クラスだった比率も第1期では全体の80%を占めていたが、第2期では33%、第3期では12%に落ち込んでいる。平均年齢も下がっており、第3期になると24歳以下が全体の80%を占めていた。

こうした若年化の流れは第4期にも続いており、第3期と第4期では来日後に韓国代表に成長した選手数で大きな違いがあった。第3期では育成年代での代表経験者の数が全体の34%(44名)だったが、第4期でのそれは29%(29名)と落ち込んでいる。すべての期を含めて最低レベルにあった。

つまり、第4期ではプロや代表での実績もない「低年齢・無実績」選手がさらに増えていたことがわかった。J1よりもJ2やJ3でプレーする選手のほうが多く、在籍1年でJリーグを離れた選手が47名いたことも判明した。

年代	1993年～2002年	2003年～2008年	2009年～2015年	2016年～2023年
来日選手数	25名	30名	130名	103名
来日年齢	25.92歳	21.87歳	22.85歳	23.62歳
代表経験者	20名	10名	16名	19名
日本でプロ	6名	16名	76名	35名
来日後に代表	1名	6名	17名	2名
平均在籍年	3.28年	2.97年	3.09年	2.1年

表2 韓国人Jリーガー全4期の統計データ

第3節 文献調査をもとにした「移籍動機」フレーム分析

今回の調査では筆者の著書『イルボンはライバルか 韓国人Jリーガー28名の本音』（SPORTAL KOREA、2015年）を活用した文献調査を行なった。同書は1996年～2015年までの期間、著者が韓国人Jリーガーたちを直接取材し、『サッカーダイジェスト』『Sports Graphic Number』『大韓サッカー協会公式ウェブサイト』などに寄稿・掲載された記事を収録した電子書籍で、2016年に韓国版が書籍として出版されている。これに加えて『ヤフー・ジャパン』などに寄稿したインタビュー記事も文献調査した。併せて29名のインタビュー記事となる。

また、2016年以降に来日した選手たちについては韓国メディアでのインタビュー記事、移籍確定記事などで11名の選手の文献調査を行なった。

そして、文献調査した40名のインタビュー記事のフレーム分析を実施。以下に記した6つのカテゴリーを設定し、ひとつの記事内で最大3つのカテゴリーを抽出して分析した。

カテゴリー	内容
スキルアップ	技術や戦術的な理解など競技全般の向上
キャリアアップ	代表招集や欧州進出などに繋がる可能性がある。
年俸・収益	高額年俸、好待遇などへの魅力。
環境的要因	施設、運営、リーグの人気や選手・指導者の国際性。
次善の選択	海外進出やモチベーション維持のため。
そのほか	Kリーグ・ドラフト回避、家族問題、兵役問題など。

表3 カテゴリー別フレーム分析

表3はそのフレーム分析をカテゴリー別に分類したものである。ここに挙げた各カテゴリーへの理解を深めるために、各カテゴリーの事例を挙げる。

第1項 スキルアップ

定義:技術や戦術的な理解など、サッカーの競技力全般の向上をJリーグに期待している。

ノ・ジョンユン(1993～2002)

- ・韓国人Jリーガー第1号。大学からJリーグでプロに。
- ・初年俸は推定2億5000万ウォン(『スポーツソウル』1992年11月18日)。1995年には年俸6800万円(約5億2000万ウォン)で韓国スポーツ所得ランキング1位(『中央日報』1995年12月10日)になっている。
- ・一部メディアから「裏切り者」と罵られたこともあった(『盧廷潤 裏切り者と呼ばれて』苅部謙一、2002)。

「Jリーグにはジーコ、リネカー、リトバルスキーという世界の超一流選手が集まることが決まっていたでしょ。私は純粋に、そこで自分の力を試してみたかった。そのようなチャンスはお金で買えるものではないから」

チョ・ヨン Chol(2007～2014、2019)

- ・KFAの欧州留学プロジェクトにも抜擢されたエリート。高校卒業後に横浜FC入り。
 - ・Jリーグで経験を積み、U-23韓国代表、韓国代表にも選出された。
 - ・2014年にカタル・リーグへ、翌年は韓国復帰し兵役を務めた。
 - ・兵役終了後もふたたびJリーグに戻り、JFLや関東1部でプレー。
- 「Kリーグでもプレーできましたが、一度は海外を経験して技量を磨きたいと思った。韓国のファン・ソンホン先輩が99年J得点王になったと聞き、勇気づけられました」

第2項 キャリアアップ

定義:代表招集や欧州進出など、選手としての実績構築を期待したJリーグ進出。

パク・チソン(2000～2002)

- ・大学を休学して当時の韓国人Jリーガー最年少、19歳で京都へ。
 - ・初年俸は5000万円(『韓国日報』2000年5月16日)
 - ・Jリーグでプレーしながら韓国代表の主力に成長し、2002年ワールドカップで活躍。
 - ・2003年1月オランダ・リーグへ。その後、名門マンチェスター・ユナイテッドに移籍。
- 「Jリーグ経由、欧州行き」という流れを示した。

「大学を卒業してKリーグに行くこともできたが、そうするとあと2年待たなければならなかった。一日も早くプロになりたいかった。それに待遇や条件の良いJリーグが興味を示してくれるなんて、大学生であった僕にとってはいつ巡ってくるかもわからないチャンスのように思えた。みすみす逃すことはできない、絶好の機会だった」

キム・ミンテ(2015～2023)

・中堅大学を卒業後に J リーグへ。U-23 韓国代表にも成長。

・2022 年の推定年俸は 7000 万円(『日刊スポーツ』)

「サッカーを学び成長したくて日本に来た。僕は韓国では無名だけど、J リーグや ACL で活躍して自分の存在を知らしめたいと思っている」

第 3 項 年俸・収益

定義:高額年俸や好待遇などへの魅力から J リーグを選んだケース。

チェ・ヨンス(2001～2004)

・イングランド・プレミアリーグのウェストハム移籍に失敗して翌年にジェフ市原移籍。

・2000 年に K リーグ MVP。年俸は 2 億 8000 万ウォン(『中央日報』2000 年 3 月 9 日)。

・J リーグ進出時は移籍金 1 億円、推定年俸 8400 万円(約 8 億 8050 万ウォン)と報道。
(『毎日経済』2000 年 12 月 14 日)

「プロである以上、待遇条件は無視できない。韓国メディアに“札束を抱えて J リーグに”と揶揄されたが、プロなので待遇条件は無視できなかった」

第 4 項 環境的要因

定義: J リーグの人気や国際性、練習施設、運営面などを評価しての移籍。

ハ・ソクジュ(1998～2000)

・2 度のワールドカップ出場、K リーグ・ベストイレブン選出回数も多数。

・J リーグ進出時は K リーグ年俸 4 位の 1 億 2000 万ウォンから推定年俸 7500 万円に。
(『京仁日報』1998 年 1 月 23 日)

「日本に来る前から衛星中継を見たり人づてに話を聞いていた。J リーグの練習環境は本当に素晴らしと。実際、試合会場はもちろん、練習場の芝生も一年中青々していた。しかも、練習場が 2～3 面もある。僕が若い時は芝生の競技場でさえ見ることが少なかったから、来日して各地に遠征したときは本当に驚いた」

チョ・ジェジン(2004～2007、2009～2010)

・兵役後に 21 歳で J リーグに進出し、2 年後のワールドカップ・ドイツ大会に出場。

・「J リーグ経由欧州行き」を目指すも失敗。その後、韓国に戻るも 2009 年に J リーグ復帰。

・2004～2005 年に清水エスパルス、2009 年～2010 年にガンバ大阪で活躍。

・2004 年時は移籍金 1 億円、年俸は未公開。

・ガンバ大阪移籍前は年俸 3 億 5000 万ウォン、ガンバ大阪移籍時は推定 1 億円と報道された。(『東亜日報』2008 年 12 月 25 日)

「決してお金だけで決めたんじゃない。僕にとってお金以上に大切なのは環境なんですよ。大勢のサポーターやファンなど、たくさんの人々の声援で埋まったスタジアム、サッカーに集中環境できる施設と運営体制など、そういった環境面の良さに惹かれて、Ｊリーグに戻ってきました」

第５項 次善の選択

定義:海外進出やモチベーション維持など、次善策としてＪリーグを選んだケース。

コ・ジョンウン(1997～1998)

- ・Ｋリーグ MVP、1996 年にはＫリーグ最高年俸者に。
- ・Ｋリーグ初のＪリーグ移籍選手として 1997 年にセレッソ大阪と契約。
- ・移籍金 9 億 6000 万ウォン、年俸 5 億 6000 万ウォンと報じられた。（『中央日報』1996 年 11 月 28 日）

「1994 年のワールドカップが終わって、ドイツのレバークーゼンからのオファーがありましたが、条件が合わず、1997 年にセレッソ大阪と契約しました。日本と韓国はライバル関係だったので、サッカーファンや協会、マスコミまでも反対していました。韓国のスタープレイヤーがヨーロッパではなくて、なぜ日本のＪリーグなんだと。もし 20 代なら違うリーグに行けたかも知れませんが、30 代を越えてヨーロッパで受け入れてくれるチームもなかったわけです。Ｋリーグでは 1989 年には新人王を獲得し、1994 年には MVP を受賞したりと、すべてやってのけた感じもあったので、環境を変えたかったわけです。やはりプロとしてチャレンジすることは忘れたくなかったのです」

キム・スング(2016～2022)

- ・Ｋリーグでプロ・デビューし、その後ヴィッセル神戸に。移籍金、年俸ともに非公開。
- ・アジア枠が徹底された 2019 年に出場が減り、Ｋリーグ復帰。翌年に柏でＪリーグ復帰。
- ・その後はサウジアラビアのプロ・リーグへ。

「韓国から欧州に行った GK はいない。だが、Ｊリーグには欧州に行った GK がいる。Ｊリーグには自分の最終目標を達成するための近道だと思った」

第７項 そのほか

定義:Ｋリーグ・ドラフト、家族事情などを理由にＪリーグ行きを決めたケース。

アン・ジョンファン(2002～2005)

- ・イタリア、日本、フランス、ドイツ、中国で活躍した韓国サッカー界の“ファンタジスタ”
- ・セリエ A ペルージャに在籍するも 2002 年ワールドカップ後にＪリーグへ。

・横浜 F・マリノスなどへ経て、2006 年から再び欧州へ。

「2002 年ワールドカップ直後にイングランドのブラックバーンとの契約を終えサインもしたが、僕の所有権を持つペルージャとの問題が発生し、仕方なく日本でプレーすることになった。そのため意欲がなくなってしまった部分もありましたが、一方で違う考えもありました。日本でもっと頑張らなければ、ふたたびヨーロッパに進出することはできない。良い結果を残さなければ、ずっと日本にいななければならない。そう思った。最終的には日本で結果を残したあと、またヨーロッパに進出することができました」

キム・ボギョン(2010～2012、2015、2017～2019)

・ U-20 代表で活躍した有望株ながら、大学を中退して J リーグに。

・ J リーグ時代にワールドカップ、オリンピックなどに出場。

・ その後、ウェールズのクラブに移籍しプレミアリーグでもプレーした。

・ イギリスで活躍後、再び J リーグに。J リーグでは推定年俸 5000 万円(2018 年)が最高。

「K リーグにはドラフトがあって自分が望むクラブに行けない。たがら K リーグには行かず、J リーグを選んだ。J リーグには高校のときから興味があったんです」

選手名	ポジション	来日年	来日歳	スキル	キャリア	年俸・収益	サッカー環境	次善の選択	その他
ノ・ジョンユン	MF	1993	22	○		○	○		
コ・ジョンウン	FW	1997	31			○	○	○	
ホン・ミョンボ	DF	1997	28			○	○	○	
ファン・ソンホン	FW	1998	30				○	○	○
ユ・サンチョル	MF	1999	28			○	○	○	
ハ・ソクジュ	MF	1999	30			○	○		○
キム・ドフン	FW	1998	28			○	○		○
ユン・ジョンファン	MF	2000	27			○	○	○	
キム・ヒョンソク	FW	2000	33			○	○		○
パク・チソン	MF	2000	19	○	○		○		
チェ・ヨンス	FW	2001	28			○		○	○
アン・ヒョヨン	FW	2001	23		○	○	○		
アン・ジョンファン	FW	2002	26			○		○	○
チョ・ジェジン	FW	2004	23			○	○	○	
キム・ジンギョ	DF	2005	20	○	○		○		
チョ・ヨンチョル	MF	2007	18	○	○		○		
キム・ナミル	MF	2008	31			○	○	○	
パク・チュホ	MF	2008	21	○			○		○
パク・ドンヒョク	DF	2009	30		○		○		○
イ・ジョンズ	DF	2009	29			○	○		○
イ・グノ	FW	2009	24	○			○	○	
キム・ジンヒョン	GK	2009	23	○	○		○		
キム・ボギョン	MF	2010	21	○			○		○
キム・ミヌ	MF	2010	20	○			○		○
チョン・ウヨン	MF	2011	22		○		○		○
ク・ソンユン	GF	2012	18	○	○		○		
チェ・ソングン	MF	2012	21	○			○		○
オ・ジェソク	DF	2013	23	○			○		○
キム・ミンテ	FW	2015	22	○	○		○		
チョン・ソンリョン	GK	2016	31			○	○		○
イム・チョンビン	MF	2016	23	○	○		○		
キム・スング	GK	2016	26	○			○	○	
イ・ボムヨン	GK	2016	27	○			○	○	
ファン・ウィジョ	FW	2017	25			○	○	○	
ジョン・チュングン	MF	2017	22	○		○	○		
ベ・スヨン	DF	2017	19	○	○		○		
ナ・サンホ	MF	2019	23	○	○		○		
チュ・セジョン	MF	2021	31	○			○		○
クオン・ギョウウォン	DF	2022	30			○	○		○
オ・セフン	FW	2022	23	○	○		○		

表4 選手40人の「移籍動機」カテゴリー分類

左の表4は40名の選手たちの記事の中で見られた内容を、6つのカテゴリーに分類した結果である。1名あたり最大で3つのカテゴリーを抽出した。

最も多かったのは、環境的要因で38件(32%)が抽出された。それに続くのがスキルアップ21件(17%)。これにキャリアアップ13件(11%)を合算すると60%が、自身のスキルやキャリア向上させるために、より良い環境を求めて日本にやって来たということになる。

その一方で、プロアスリートにとって強いモチベーションなる年俸・収益は18件(15%)になっている。つまり、金銭や好待遇よりも「レベルアップできる環境」を求めて日本を選んでいる選手が多いということになる。それは第1期から第4期まですべてに共通していることがわかった。

第4節 時代区別の「移籍動機」の分布と推移

文献調査した40人を、前出の4つの時代区分に分け、時代別にカテゴリーの分布がどのようになっているかを調べた。その結果が図9になる。

すべての時代で共通するのは「環境的要因」が最も多いことであるが、時代によって「移動動機」に挙げるものに変化があることがわかった。また、増減があるものの「次善の選択」と「その他」が確認できたことだ。

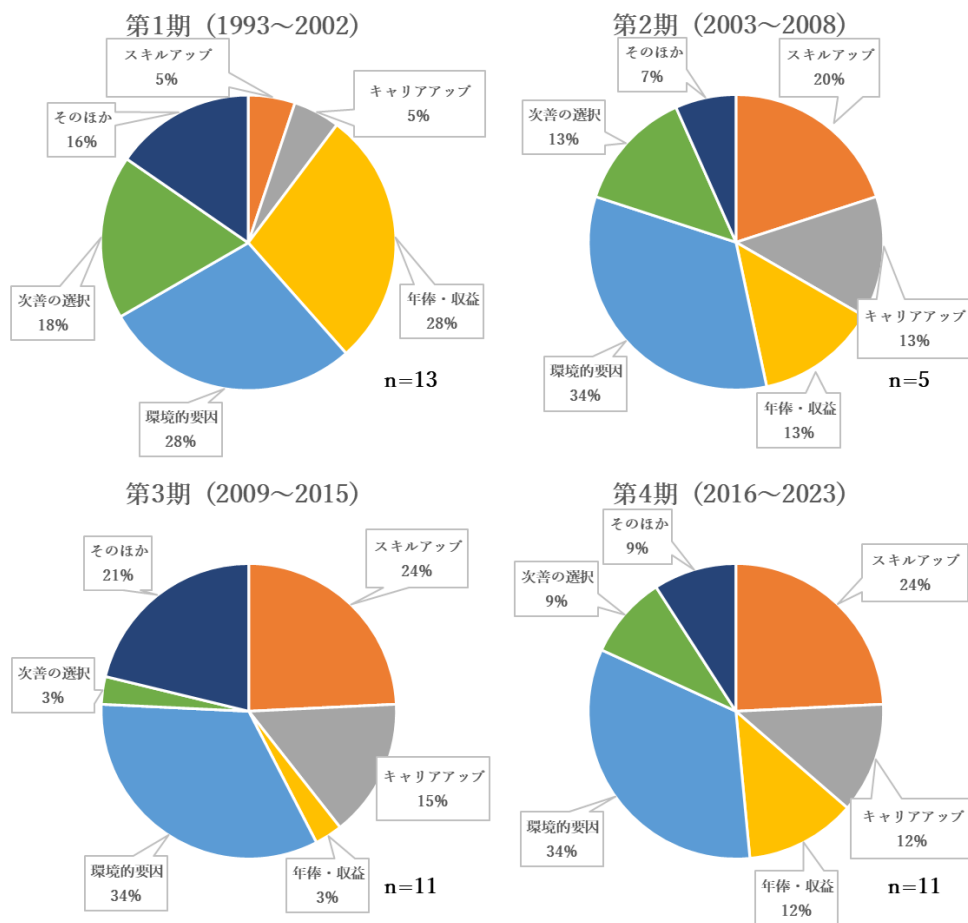


図9 期別フレーム分布

その一方で目を引いたのは増減の変化が確認できた「移籍動機」である。「年収・収益」は第1期(1993年～2002年)では28%だったが、第2期(2003年～2008年)、第3期(2009年～2015年)と低下。逆に「スキルアップ」や「キャリアアップ」は増えていた。(図10)

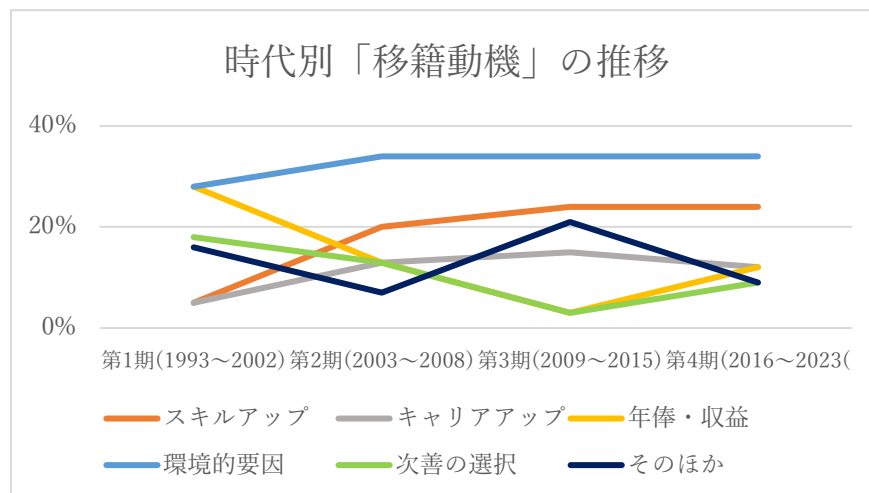


図10 時代別「移籍動機」の推移

第5節 現役選手を対象にしたアンケート調査

現役選手 31 名を対象に実施したアンケート調査は以下の通りである。

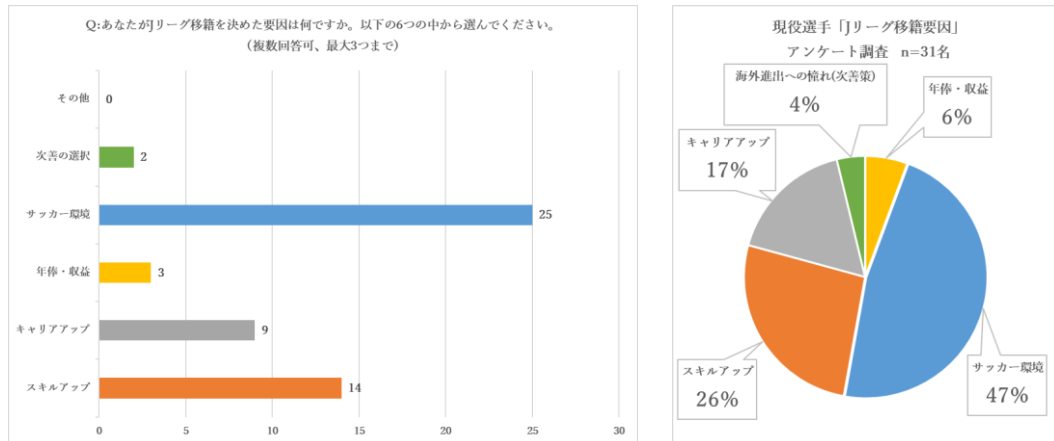


図 11 現役選手 J リーグ移籍要因アンケート調査結果

3 つまでの複数回答を可能としたため、3 項目を選んだ者もいれば 1 項目の回答だけに留まった者もいるが、特徴として挙げられるのは 31 名中、25 名が「サッカー環境」を挙げたことである。これは前出の文献調査でも共通する部分だった。

その次に多かったのが「スキルアップ」「キャリアアップ」の順で、「年俸・収益」を挙げた選手はわずか 3 名しかいなかった。

このアンケート結果を時代区分別に分けてさらに分析すると、その特徴が鮮明になった。図 12 がその結果である。

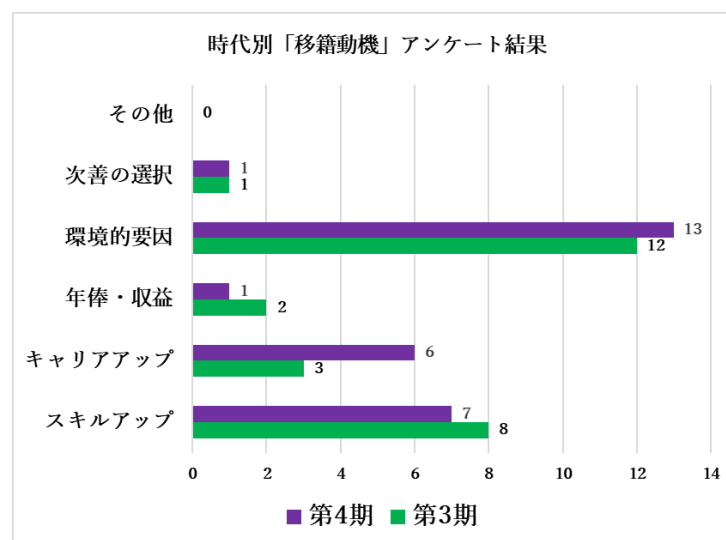


図 12 時代別「移籍動機」アンケート結果

第6節 韓国メディアが報じた韓国人選手のJリーグ進出「文献調査」

『The Changes of Paradigm in Sport Labor Migration and Its Significance: Focused on Korean Footballers』(Myung&Lee, 2018)ではKリーグ選手たちの海外移住(海外移籍)パラダイムの変化を明らかにするため、報道資料をニュースフレーム分析している。

ニュースフレーム分析とは形式的フレーム、内容的フレーム、定量的フレームなどで区別され、形式的フレームは episode frame と thematic frame に分類される(Iyengar & Simon, 1993)。今回は定量的フレーム(年度別の量的報道推移)を実施した。

調査方法としては韓国言論振興財団ニュース分析システム『BIGKIND』を活用した。

【調査方法】

韓国の全国一般紙 11 社、経済紙 8 紙、地方紙 28 紙、テレビ局 5 紙、電子紙 2 紙

- ・調査期間=1992年10月1日から2023年9月30日まで。
- ・検索ワード「Jリーグ」と「韓国人」の2単語が含まれるものを検索

その結果、30年間で約616本の記事が確認できた。2002年が最も多かった(53記事)。2002年はワールドカップ共同開催に関連して韓国人Jリーガーが多く取り上げられていた。当時の韓国メディアの論調への理解を深めるために、いくつかの記事タイトルを事例として紹介する。

「コチュダンサッカーがJリーグを席卷する。さらに大きさ増すコリアン突風、誰が吹かすか」(『東亜日報』1998年12月30日)

「日本で猛威のコリアン旋風。彼らがいるから新年からワクワクする」(『京郷新聞』1999年1月1日)

「コリアン旋風、列島を席卷する」(『釜山日報』2001年3月7日)

「Jリーグにコリアン爆風が吹き荒れる」(『ソウル新聞』2001年3月10日)

しかし、2002年以降、韓国人Jリーガーに関連した記事が減っていた。代表クラスの場合はスター性と話題性から移籍確定報道や試合出場結果報道だけではなく、インタビュー企画などの特集記事もあったが、2006年以降は年を追うごとに少なくなっており、試合出場結果はほとんど報じられなくなっていた。

同じころ、パク・チソン、イ・ヨンピョ、ソル・ギヒョン、イ・ドングッなどプレミアリーグに進出・活躍する選手が増えており、彼ら欧州でプレーする選手たちの詳細報道と比較すると、韓国人Jリーガー関連報道の減少は対照的だった。

ただ、報道記事数は減ったが、以下のような論調変化が散見された。

「J リーグ“韓国産若魚”狙い」（『中央日報』2003 年 9 月 17 日）

「日本サッカーに吹く“GK の韓流”」（『毎日経済新聞』2016 年 12 月 6 日）

「日本初のカネ風、K リーグを揺らす」（『国民日報』2017 年 6 月 23 日）

「再び火が付いた韓国産 GK の日本行きラッシュ」（『中央日報』2022 年 12 月 19 日）

2016 年以降は「J リーグに挑戦状」など、格上に用いる単語を使った見出しも散見されており、韓国メディアの J リーグに対する見方や論調にも変化があったことがわかった。

第4章 考察

本研究では、「韓国人 J リーガーの移籍動機」を明らかにするために、韓国人 J リーガーの特徴やインタビュー記事による文献調査、現役選手 31 名へのアンケートなど、様々な角度から韓国人 J リーガーについて調査し分析した。

その結果、韓国人 J リーガーの移籍動機は様々である一方、いくつかの特徴があることも明らかになった。本章では韓国人 J リーガーの移籍動機について考察する。

第1節 「アジア枠」の導入が韓国人 J リーガーの増減に影響したか

J リーグは組織制度改変で受け入れる選手の規模を拡大させてきた。リーグの規模が拡大されればクラブは増え、クラブが増えれば登録選手も増える。つまり、リーグ拡大によるクラブ増加は、選手にとっては職場創出機会となるが、1993 年の創設時は 10 クラブ計 279 名の規模が、1999 年に 2 部リーグである J2 リーグ、2014 年に 3 部リーグである J3 リーグが始まったことで、現在(2023 年 2 月 1 日時点)では 60 クラブ計 1858 名の選手が登録される巨大なリーグ規模となった。

こうしたリーグの組織制度改変と併せて、J リーグは外国籍選手枠も改変してきた。

J リーグにおける外国籍選手枠は、1993 年から 2008 年までは「一般外国籍枠」としてチーム登録 3 名・試合出場 3 名までとしていたが、2009 年からは「一般外国籍枠」とは別に「アジア枠」を設けられた。

「アジア枠」とは 2009 年から AFC(アジアサッカー連盟)が設けた「Asian quota rule」のことで、AFC 加盟国の選手 1 名は「一般外国籍枠」に含まず、登録・出場を許可するという制度のことだ。これによって各クラブは「一般外国籍枠」の 3 名とは別に、AFC 加盟国の国籍を持つ選手 1 名を雇用できるようになった。

この「アジア枠」導入で韓国人 J リーガーが増えたという見方は一理ある。というのも、アジア枠導入前年の 2008 年に J リーグでプレーした韓国人選手は 10 名だったが、アジア枠導入年の 2009 年は 26 名と、2.5 倍以上になっていた。その後も数は増え、53 名が登録された 2013 年にはブラジル勢(49 名)を抜いて J リーグで最も多い外国籍勢力になった。59 名になった翌 2014 年にもブラジル勢を抜いてトップに立っている。

注目したいのは、J リーグ全体の外国籍選手割合との相对比较だ。

アジア枠導入前の 2008 年、J リーグでプレーする外国籍選手の 19%が韓国人選手だったが、2009 年は 34%、2010 年は 42%、2011 年は 45%、2012 年は 54%、2013 年は 53%と外国籍選手全体の中でも韓国人選手の比重が増えて存在感が増していった。2013 年は J1 が 18 クラブ、J2 が 22 クラブあったが、韓国人選手がいなかったのは 3 クラブだけだったほどだ。

このように多くのクラブが「アジア枠」を活用して韓国人選手と契約した。その理由に

つて J リーグと K リーグにパイプを持つエージェントは「過去の失敗例が少なく安定した働きが見込める韓国人選手が、J リーグのアジア枠の対象になるのは同然のことだった」と語っていたが、韓国人選手の立場としてもアジア枠は魅力的だった。導入当時、韓国人 J リーガーだったユ・サン Chol が『週刊サッカーダイジェスト』の記事の中で言っている。

「アジア枠は韓国人選手も恩恵を受けることになる。というのも、韓国人も J リーグでは外国人選手である以上、これまではブラジルやヨーロッパなどの選手たちと 3 つの外国人枠を争わねばならなかったが、アジア枠の導入でそうした競争もなくなるわけだ。J リーグ進出を希望する韓国人選手にとっては追い風になるだろう」

J リーグのクラブにとっても韓国人選手にとっても、「アジア枠」は互いにメリットがあったわけだ。韓国人「アジア枠」という新たな登録枠が韓国人 J リーガー増加の一端を担ったのは間違いないだろう。

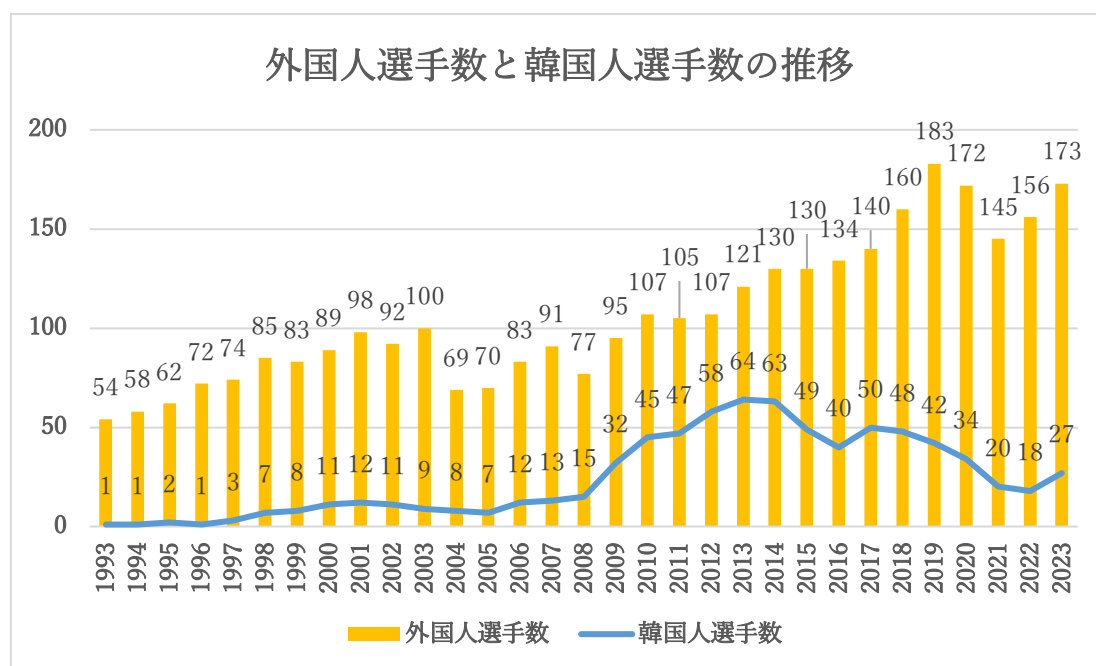


図 13 J リーグ選手数、外国人選手数、韓国人選手数の推移

ただ、J3 が始まってチーム数が増えた 2014 年以降、韓国人選手の割合は徐々に減少していた。

J リーグでは 2014 年から「アジア枠」に加え、「J リーグ提携国枠」も新たに設けた。「J リーグ提携国枠」は東南アジアの 5 カ国（タイ、ベトナム、ミャンマー、シンガポール、カンボジア）の国籍を有す選手を、各クラブが最大で 2 名まで登録できる制度で、「アジア枠」とは別に設けられたものなので、韓国人選手の枠に制限が加えられたわけではない。

また、J リーグでは 2019 年からアジア枠を廃止し、J リーグ提携国枠の登録数制限もな

くす代わりに、一般外国籍枠の登録数制限をなくして外国籍選手の同時出場が 5 人まで可能となった。

一般外国人 3 名+アジア枠 1 名+ J リーグ提携国枠という制限がなくなり、国籍や出身地域に縛られない自由制度となったのだ。これによってヴィッセル神戸や浦和レッズのように、外国籍枠をヨーロッパ勢やブラジル勢だけで固めるクラブも出現した。

アジア枠という優遇枠がなくなったことは韓国人選手にとって不利になったという見方もできるが、韓国人 J リーガーの数が減っているわけでもない。直近の 2023 年とアジア枠導入前の 2008 年を比べても、2023 年のほうが多い。

つまり、確かにアジア枠は韓国人選手増加を後押した一因でもあるが、「アジア枠」という枠の有無が韓国人選手の J リーグ移籍動機に決定的な役割を果たしているわけではないと考えられる。

第 2 節 韓国人 J リーガーたちの「移籍動機」

第 1 項 移籍要因で「年俸への期待」が少なくなったのはなぜか

Maguire(1999)によるとスポーツ選手の海外移動のパターンは「Pioneers パイオニア」「Settlers 移住開拓者」「Mercenaries 傭兵・報酬による雇用」「Nomadic cosmopolitans 定住しない放浪者」「Returnees 出国して帰国する人」で区分できるという。

これに基づく韓国 J リーガーは「傭兵」に分類され、雇われた者の価値と動機は「報酬」と関係する。プロスポーツ選手にとって「年俸」はモチベーションであり、韓国人サッカー選手の J リーグ移籍の際にも「年俸」がひとつの判断基準になっていてもおかしくはないだろう。Myung&Lee(2018)も、1993 年から 2000 年代序盤までの韓国人選手の J リーグ進出の大きな動機となったのは「経済的収益だった」と結論づけている。

しかし、前出した韓国人 J リーガーの文献調査やアンケート調査によると、近年は「年俸」を移籍動機に挙げる選手がさほど多くはなかった。年俸額をまったく度外視して J リーグへの移籍を決めているわけではなさそうだが、年俸が移籍動機の決定的要素になっていないようなのだ。

第 1 期は「年俸・収益」を移籍動機にしていた選手が最も多かったが(28%)、第 2 期は 13%、第 3 期は 3%、第 4 期は 12%と時代を追うごとに「年俸・収益」を重視する選手が少なくなっていた。

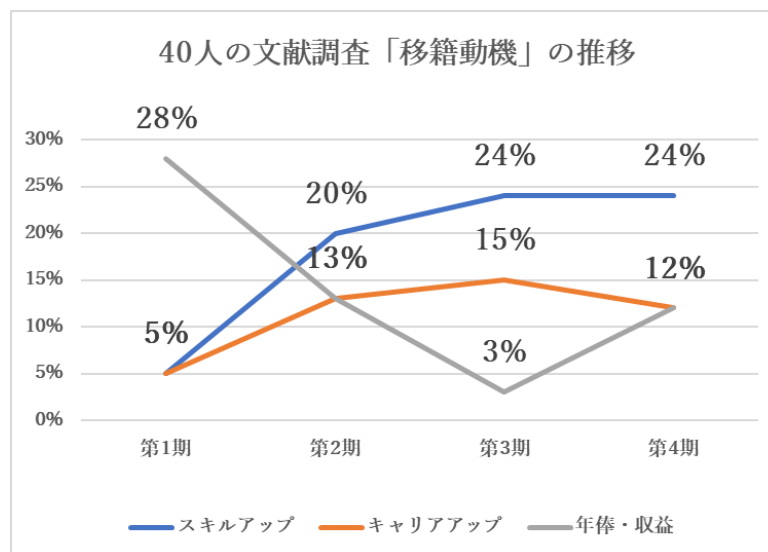


図 14 40 人の文献調査「移籍動機」の推移

現役選手 31 名を対象にしたアンケート調査でも移籍動機として「年俸・収益」を挙げたのはわずか 5% だけだったことも図 10 で紹介した通りである。

なぜこのような変化が起きたのか。その背景を探るために K リーグと J リーグの年俸状況を調査した。

表 5 は 1990 年代の K リーグ年度別最高年俸者と同年代に J リーグでプレーした韓国人選手の推定年俸を比較したものである。K リーグ年度別最高年俸、韓国人 J リーガー推定年俸ともに、韓国メディアが報道した記事に基づいており、当時のウォンの価値を推測するためにウォン→円の為替レート推移も調査して彼らの年俸を円換算した。

■ K リーグ 最高年俸					■ J リーグ推定年俸				
年度	選手名	金額	円換算	1ウォン	年度	選手名	推定年俸	円換算	1ウォン
1994年	キム・ジュソン	8400万ウォン	1067万円	¥0.12710	1993年	ノ・ジョンユン	2億5000万ウォン	3465万円	¥0.13860
1995年	ホン・ミョンボ	1億ウォン	1219万円	¥0.12190	1997年	コ・ジョンウン	5億6000万ウォン	7263万円	¥0.12970
1996年	コ・ジョンウン	1億2500万ウォン	1690万円	¥0.13520	1997年	ホン・ミョンボ	7億5000万ウォン	9727万円	¥0.12970
2000年	チェ・ヨンス	2億8000万ウォン	2671万円	¥0.10020	2001年	チェ・ヨンス	8億8050万ウォン	8400万円	¥0.09540

表 5 K リーグ、J リーグ各最高年俸選手及び金額

1994 年に韓国代表のエースでドイツでもプロ生活を送ったキム・ジュソンが年俸 8400 万ウォン(約 1067 万円)で K リーグ年俸 1 位になっているが、J リーグではその前年にプロ 1 年目のノ・ジョンユンが推定年俸 2 億 5000 万ウォン(約 3465 万円)でサンフレッチェ広島と契約を交わしている。『中央日報』によれば、ノ・ジョンユンは 1995 年には年俸 6800 万円(約 5 億 2000 万ウォン)で韓国スポーツ所得ランキング 1 位(『中央日報』1995 年 12 月 10 日付け)にもなっていた。ノ・ジョンユンは当時の J リーグ高額年俸者だったリネ

カー、ジーコ、リトバルスキーに比べると年俸が少なかったことで知られていたが、そのノ・ジョンウンと比較しても、JリーグとKリーグとの間には年俸差があったことがわかった。

そしてその差は、KリーグからJリーグにやってきた韓国人選手の年俸を比較するとより鮮明に表れた。

1995年に年間MVPに輝いたホン・ミョンボがKリーグ初の1億ウォン選手になり、翌1996年にはコ・ジョンウンが1億2500万ウォンでKリーグ最高年俸者になっているが、ふたりは1997年に揃ってJリーグに移籍。その年俸は7億ウォン(約9079万円)～5億6000万ウォン(約7263万円)と報じられていた。

つまり、ホン・ミョンボとコ・ジョンウンはJリーグに移籍することで、Kリーグ時代よりも7～5倍近い年俸を手にしたことになる。同じプロ・リーグでありながら日韓に大きな年俸差があったことは明白で、それが韓国人選手たちの移籍動機に影響を及ぼしたことは、想像に難くない。当時のことをホン・ミョンボもこう明かしている。

「他の選手がJリーグについていろいろと尋ねてきました。施設とか練習の方法とかについては話しましたが、選手に大きな影響を与える年俸の問題などについては話をしませんでした」(『Sports Graphic Number』1999年4/8号「売国奴から愛国者への6年」より)

つまり、Jリーグの年俸が高いことは韓国でも広く知られており、それが当時の選手たちにとっては強い動機付けになっていたわけだ。第1期(1993年～2002年)の移籍動機に「年俸・収入」と答える割合が多かった理由も、ここにあると考えられる。

しかし、2002年ワールドカップ開催以降、Kリーグでも年俸額が増加し、代表クラスなら5億ウォン、スター選手なら7億ウォンといった具合にKリーグの最高年俸も年を追うごとに上がっていた。

それは下記にある表6のKリーグの韓国人選手・高額年俸ランキングを見てもわかるだろう。Kリーグでは2014年から高額年俸者(韓国人選手、外国籍選手の2種類)の上位を公開しているが、その金額は年を重ねるごとにアップしていた。1ウォン=0.1円で換算すると1億円は優に超えていたことがわかった。

順位	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
1位	イ・ドングッ	イ・ドングッ	キム・シヌク	キム・シヌク	キム・シヌク	キム・ジンズ	キム・ボギョン	キム・ボギョン	キム・ジンズ
	11億1400万ウォン	11億1250万ウォン	14億6846万ウォン	15億4000万ウォン	16億5000万ウォン	14億3500万ウォン	13億8000万ウォン	13億ウォン	14億7000万ウォン
2位	キム・シヌク	キム・シヌク	キム・ボギョン	キム・ジンズ	キム・ジンズ	シン・ヒョンミン	ホン・ジョンホ	イ・チャンドン	キム・ヨングォン
	10億7000万ウォン	10億5370万ウォン	10億860万ウォン	14億6000万ウォン	12億3500万ウォン	10億4550万ウォン	12億6100万ウォン	12億8600万ウォン	13億9000万ウォン
3位	キム・ドゥヒョン	チャン・ソンリョ	イ・ドングッ	シン・ヒョンミン	シン・ヒョンミン	イ・ドングッ	イ・チャンドン	ホン・ジョンホ	キム・ボギョン
	8億3200万ウォン	7億5800万ウォン	8億6726万ウォン	11億1000万ウォン	10億7700万ウォン	10億1054万ウォン	12億5800万ウォン	12億6200万ウォン	13億4000万ウォン
4位		シン・ファヨン	イ・グノ	イ・ドングッ	イ・ドングッ	ホン・ジョンホ	チャ・ヒョヌ	チャ・ヒョヌ	イ・チャンドン
		6億5800万ウォン	8億6190万ウォン	9億9056万ウォン	10億2392万ウォン	8億7060万ウォン	10億9600万ウォン	12億4300万ウォン	13億2000万ウォン
5位		チェ・チャルスン	ヨム・ギフン	イ・ジェソン	ホン・ジョンホ	チェ・チャルスン	ユン・ビッカラム	ユン・ビッカラム	チャ・ヒョヌ
		6億3710万ウォン	7億3750万ウォン	8億44500万ウォン	9億6380万ウォン	8億2438万ウォン	10億6500万ウォン	10億6400万ウォン	13億2000万ウォン

表6 Kリーグ 高額年俸者ベスト5

また、日本の『日刊スポーツ』で毎年発表される選手名鑑の「推定年俸」をもとに、韓国人 J リーガーの高額年俸者ベスト 5 を年度別に抽出してみると、少なくともトップ選手に限っては K リーグのほうが良い場合もあった。

順位	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
1位	チョ・ヨンチョル 5000万円	チョン・ウヨン 5000万円	ハ・デソン 8500万円	キム・ジンヒョン 1億円	キム・ジンヒョン 1億円	チョン・ソンリョン 1億円	キム・ジンヒョン 1億円	キム・ヨングオン 1億円	クォン・ギョングオン 1億1000万円
2位	キム・ジンヒョン 3500万円	キム・ミス 4000万円	チョン・ソンリョン 6500万円	キム・スング 7500万円	キム・スング 9000万円	キム・ジンヒョン 1億円	キム・ヨングオン 1億円	キム・ジンヒョン 1億円	キム・ジンヒョン 1億円
3位	ファン・ソッコ 2500万円	ファン・ソッコ 3000万円	キム・スング 5500万円	チョン・ソンリョン 7500万円	チョン・ウヨン 9000万円	ファン・ウィジョ 1億円	チョン・ソンリョン 8000万円	チョン・ソンリョン 8000万円	チョン・ソンリョン 8000万円
4位	チョン・ウヨン 2000万円	オ・ジェソク 2000万円	キム・ミス 4500万円	ユン・ソギョン 5000万円	チョン・ソンリョン 8000万円	キム・スング 9000万円	ク・ソンスン 8000万円	クォン・スンテ 7000万円	チュ・セジョン 7000万円
5位	キム・ジンス 1500万円	キム・チャンス 1600万円	オ・ジェソク 3000万円	クォン・スンテ 5000万円	ファン・ウィジョ 8000万円	チャン・ヒョンス 8000万円	キム・スング 7000万円	チュ・セジョン 6000万円	キム・ミンテ 7000万円

表7 日刊スポーツの選手名鑑報道をもとにした韓国人 J リーガー「推定年俸」ランキング

例えば 2015 年 K リーグ 3 位(7 億 5800 万ウォン)の高額年俸者だったチョン・ソンリョンの場合、2016 年に来日したときの年俸は推定 6500 万円だった。この金額をウォンに換算すると 6 億 9370 万ウォン。K リーグで受け取った年俸のほうが高かったことになる。

また、キム・ボギョンは 2016 年に K リーグ 2 位(10 億 860 万ウォン)だったが、2018 年に J リーグ在籍時は年俸 5 億ウォン（約 5000 万円）だったと報じられている。2020 年に K リーグ復帰すると年俸は 13 億 5800 万ウォンに増加。キャリアを積んだことによる評価もあるだろうが、K リーグの年俸が J リーグと比べても遜色ないことの表れだ。

1990 年代から 2000 年代序盤にかけては K リーグの年俸水準が低かったため、J リーグの高額年俸が選手たちにとって大きな魅力になっていたと思われるが、K リーグの年俸水準も徐々に高くなり、2010 年以降は韓国人 J リーガーたちのそれと比べても遜色なくなったわけだ。

その変化を把握すべく K リーグと J リーグの 30 年間の最高年俸・平均年俸の推移を調べた。表 8 はその結果である。

K リーグは 2014 年から最高年俸と平均年俸を公表しているが、それ以前は韓国の報道記事やクラブの公式発表などを参考にした。2004 年から 2013 年までは韓国において個人情報保護の観点から報道記事とクラブ発表もなかったため、空欄にした。

一方、J リーグは『日刊スポーツ』がシーズンごとに発刊している選手名鑑、もしくは同紙が開幕前に特集しているクラブ別登録選手リストに記載された最高年俸、平均年俸(いずれも推定)に基づいて統計を取った。

年度	Kリーグ最高年俸		Kリーグ 最高年俸選手	Kリーグ平均年俸		Jリーグ最高年俸		Jリーグ 最高年俸選手	Jリーグ平均年俸		レート
	ウォン	円換算		ウォン	円換算	円	ウォン換算		円	ウォン換算	
1993	5700万ウォン	790万円	チョン・ヨンファン			1億2000万円	8億6580万ウォン	三浦知良	測定不可		¥0.1386
1994	8400万ウォン	1067万円	キム・ジュン			2億4000万円	18億8827万ウォン	三浦知良	2200万円	1億7309万ウォン	¥0.1271
1995	1億500万ウォン	1279万円	コ・ジョンウン			2億4000万円	19億6882万ウォン	三浦知良	2490万円	2億426万ウォン	¥0.1219
1996	1億3500万ウォン	1825万円	コ・ジョンウン			2億4000万円	17億7514万ウォン	三浦知良	2530万円	1億8713万ウォン	¥0.1352
1997	1億4000万ウォン	1815万円				2億4000万円	18億5042万ウォン	三浦知良	2700万円	2億817万ウォン	¥0.1297
1998						1億5000万円	15億9404万ウォン	三浦知良	2420万円	2億5717万ウォン	¥0.0941
1999	2億2000万ウォン	2107万円	キム・ビョンジ			8500万円	8億8726万ウォン	中山雅史	2190万円	2億2860万ウォン	¥0.0958
2000	3億ウォン	2862万円	コ・ジョンズ			8500万円	8億9098万ウォン	中山雅史	1930万円	2億230万ウォン	¥0.0954
2001	3億3500万ウォン	3152万円	キム・ドファン			8500万円	9億329万ウォン	中山雅史	1810万円	1億9234万ウォン	¥0.0941
2002	3億5500万ウォン	3557万円	キム・ドファン			8500万円	8億4830万ウォン	中山雅史	1750万円	1億7465万ウォン	¥0.1002
2003	4億1000万ウォン	3989万円	シン・テヨン			1億円	10億2884万ウォン	梶崎正剛	1890万円	1億9424万ウォン	¥0.0973
2004						1億円	10億5932万ウォン	梶崎正剛	1940万円	2億550万ウォン	¥0.0944
2005						1億円	9億2936万ウォン	梶崎正剛	1960万円	1億8215万ウォン	¥0.1076
2006						1億8000万円	14億7783万ウォン	小野伸二	1880万円	1億5435万ウォン	¥0.1218
2007						1億8000万円	14億2067万ウォン	小野伸二	1830万円	1億4443万ウォン	¥0.1267
2008						1億6000万円	16億6320万ウォン	高原直泰	1860万円	1億9334万ウォン	¥0.0962
2009						1億6000万円	21億7687万ウォン	高原直泰	2090万円	2億8435万ウォン	¥0.0735
2010						1億6000万円	21億803万ウォン	高原直泰	2110万円	2億7799万ウォン	¥0.0759
2011						1億5000万円	20億8044万ウォン	田中マルクス闘莉王	2000万円	2億7739万ウォン	¥0.0721
2012						1億5000万円	21億1565万ウォン	田中マルクス闘莉王	2060万円	2億9055万ウォン	¥0.0709
2013	15億ウォン	1億3380万円	キム・ジョンウ	1億4609万7000ウォン	1303万円	1億6000万円	17億9372万ウォン	田中マルクス闘莉王	1930万円	2億1636万ウォン	¥0.0892
2014	11億1400万ウォン	1億1206万円	イ・ドングッ	1億6300万ウォン	1638万円	1億5000万円	14億9105万ウォン	遠藤保仁	2270万円	2億2564万ウォン	¥0.1006
2015	11億1256万ウォン	1億1915万円	イ・ドングッ	1億4840万9000ウォン	1589万円	1億8000万円	16億8067万ウォン	遠藤保仁	2020万円	1億8860万ウォン	¥0.1071
2016	14億6846万ウォン	1億3759万円	キム・シンウク	1億5095万2000ウォン	1414万円	1億6000万円	17億757万ウォン	遠藤保仁	2120万円	2億2625万ウォン	¥0.0937
2017	15億4000万ウォン	1億5276万円	キム・シンウク	1億6861万1000ウォン	1672万円	1億5000万円	15億1209万ウォン	遠藤保仁	2340万円	2億3588万ウォン	¥0.0992
2018	16億500万ウォン	1億6114万円	キム・シンウク	1億9808万ウォン	1988万円	1億4500万円	14億4422万ウォン	遠藤保仁	2670万円	2億6593万ウォン	¥0.1004
2019	14億3500万ウォン	1億3431万円	キム・ジンス	1億9911万ウォン	1863万円	1億5000万円	16億256万ウォン	金崎夢生	3510万円	3億7500万ウォン	¥0.0936
2020	13億5800万ウォン	1億2289万円	キム・ボギョン	1億9917万2000ウォン	1802万円	1億4000万円	15億4696万ウォン	酒井高德	3430万円	3億7900万ウォン	¥0.0905
2021	13億ウォン	1億2467万円	キム・ボギョン	2億747万ウォン	1989万円	1億4000万円	14億5985万ウォン	酒井高德	3220万円	3億3576万ウォン	¥0.0959
2022	14億7000万ウォン	1億4949万円	キム・ジンス	2億3099万ウォン	2349万円	4億円	39億3313万ウォン	大迫勇也	3370万円	3億3136万ウォン	¥0.1017
2023	15億3000万ウォン	1億6309万円	キム・ヨンゴン	2億9545万2000ウォン	3149万円	4億円	37億5234万ウォン	大迫勇也	3630万円	3億4052万ウォン	¥0.1066

表8 Kリーグ、Jリーグの最高年俸及び平均年俸の推移

それぞれのリーグの国内選手最高年俸額を年度別に比較してみると、JリーグとKリーグの最高年俸の開きが徐々に縮まり、近年はほぼ差がなくなったことがわかった。2018年にはKリーグのほうがJリーグよりも高かった年もある。

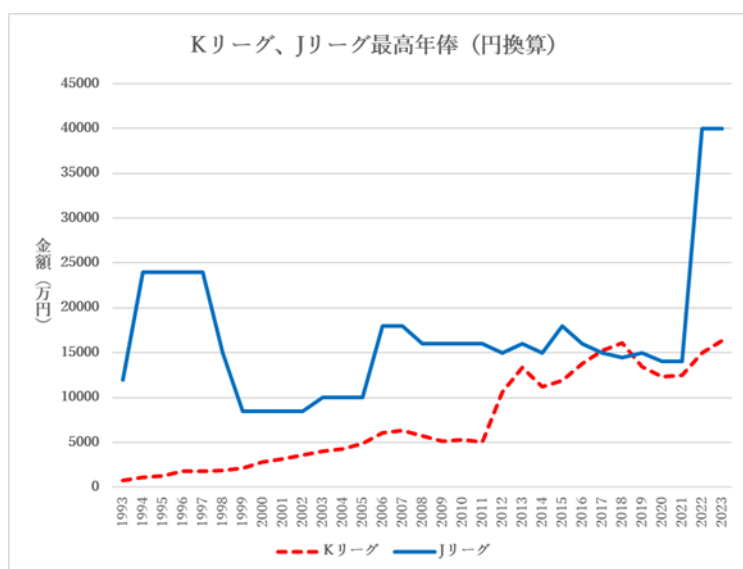


図15 KリーグとJリーグの国内選手最高年俸の比較

2021年8月にJリーグ復帰した大迫勇也が日本人選手歴代最高年俸を更新して最高年俸では開きがついたが、平均年俸では確実にKリーグがJリーグとの差を縮めていた。

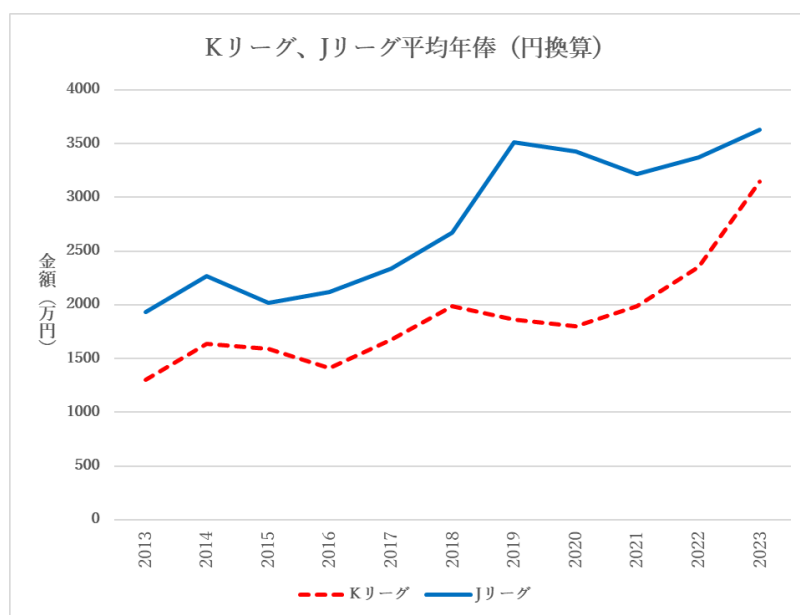


図 16 Kリーグ1とJ1リーグの平均年俸の推移

平均年俸でも 2023 年は、Kリーグ1 が 3149 万円だったのに対して J1 は 3630 万円。J1 のほうが高いが、J1 にはイニエスタ(推定年俸 20 億円)ら有力外国人の年俸も含まれており、日本人選手だけに限定した場合、J1 の平均年俸はもう少し低くなると思われる。つまり、平均年俸では Kリーグと Jリーグの間に大きな差はなくなりつつあることがわかった。

さらに付け加えると、2部リーグに関してはKリーグのほうが年俸は高いと思われる。

というのも、Jリーグでは平均年俸を公開していないため単純比較はできないが、J1 で約 3000～3500 万円、J2 で約 400～500 万円、J3 で約 300～400 万円(『年収ガイド』)と言われている。

対して Kリーグが公式発表した Kリーグ2 の平均年俸は以下の通り。2017 年には 600 万円を超えており、2021 年には 1000 万円を超えていた。

年度	1w= ¥	Kリーグ1 平均	円換算	Kリーグ2 平均	円換算
2013	¥0.0892	1億4609万7000ウォン	1303万1852.4円	4428万8000ウォン	395万489.6円
2014	¥0.1006	1億6300万ウォン	1368万1600円	4400万ウォン	442万 6 400円
2015	¥0.1071	1億4840万9000ウォン	1589万4603.9円	4945万3000ウォン	529万6416.3円
2016	¥0.0937	1億5095万2000ウォン	1414万4202.4円	5041万9000ウォン	472万4260.3円
2017	¥0.0992	1億6861万1000ウォン	1672万6211.2円	6993万ウォン	693万7056円
2018	¥0.1004	1億9808万ウォン	1988万7232円	7354万3000ウォン	738万3717.2円
2019	¥0.0936	1億9911万ウォン	1863万6696円	8940万1000万ウォン	836万7933.6円
2020	¥0.0905	1億9917万2000ウォン	1802万5066円	1億686万3000ウォン	967万1101.5円
2021	¥0.0959	2億747万ウォン	1989万6373円	1億2228万6000ウォン	1172万7227円
2022	¥0.1017	2億3099万ウォン	2349万1683円	1億2229万6000ウォン	1243万7503.2円

表 9 Kリーグ1とKリーグ2の平均年俸の推移

この一例でもわかるように、近年は K リーグと J リーグの年俸差はほとんどなくなったため、「韓国よりも高い年俸に惹かれて J リーグに来た」という第 1 期に多かった移籍動機が成り立たなくなった。

もちろん、「年俸」を一切度外視しているわけではないだろうが、韓国でも同等、もしくはそれ以上の金額を手にするようになっただけに、選手たちも「年俸・収入」を J リーグ移籍理由として挙げなくなったと思われる。アンケート調査した選手の中には、「K リーグよりも高い高額年俸を求めるなら、日本ではなく中東や中国に行く」と語る選手もいた。

実際、近年は J リーグではなく、UAE、カタール、サウジアラビアといった中東や中国に移籍する韓国人選手が増えている。そのほとんどが K リーグはもちろん、韓国代表としても実績がある選手ばかりで、いずれも巨額の年俸が保証された大型契約の場合が多い。

ただ、中国リーグからガンバ大阪に移籍したクォン・ギョウォンや、10 年に及ぶカタールでのプロ生活を経て横浜 F・マリノスに移籍したナム・テヒのように、あえて J リーグにやって来る韓国人選手も増えている。それは、年俸や収益といった金銭条件だけではなく、別の魅力が J リーグにあるからだと考えられる。

第 2 項 韓国人選手たちはなぜ「環境的要因」を移籍動機に挙げるのか

そのひとつとして挙げられるのが、文献調査で 40 名中 38 名が挙げていた「環境的要因」だろう。一口に「サッカー環境」と言っても、そこにはさまざまな要素が含まれる。そこでまずはその理解を深めるために、文献調査にあったいくつかのコメントを事例として紹介する。

「J リーグは海外から多くの外国人選手を招き、彼らの影響で戦術的要素が進んでいて、それを習得するための練習バリエーションにも富んでいる。サッカー人として勉強になることが多い」（ユ・サンチョル/1999 年～2005 年/横浜 F・マリノス、柏レイソルなど）

「例えば取材対応はクラブが管理してくれたし、メディカル的なケアも韓国より格段に良かった。J リーグは選手がサッカーに集中できる環境が整っていた」（キム・ドフン/1998 年～1999 年/ヴィッセル神戸）

「試合会場はもちろん、練習場でも緑の芝が一年中青々としているし、フィジカルトレーニングなど、練習メニューも合理的。しかも、グラウンドの外でもチームのサポートが充実している。用具係がスパイクをしっかりと管理してくれるし、マスコミ対応もチームがきちんとやってくれる。僕ら選手はサッカーにだけ専念すれば良かった。J リーグには選手がサッカーに集中できる環境が整っている」（キム・ヒョンソク/2000 年/ヴェルディ川崎）

いずれも第 1 期に J リーグにやって来た選手たちのものであり、そのコメントの多くは自国のサッカー環境との比較で、日本のサッカー環境を高く評価していたものとなる。

参考までに当時の韓国のサッカー環境を紹介すると、1990 年代後半までサッカー専用スタジアムが 2 つしかなく、国や地方自治体が管理する天然芝の競技場も少なかった。

また、『K LEAGUE Annual Report 2023』（社団法人韓国プロサッカー連盟、2023）によると、1983 年のリーグ創設から 2000 年までの 17 年間で K リーグにおいて采配を振るっていた外国人監督はわずか 5 名しかいなかった。

1997 年当時、筆者も K リーグの現場取材したが、フィジカルコーチやホペイロ(用具係)など専門的なチームスタッフを雇用していたクラブは少なく、体力トレーニングはアシスタントコーチが指導し、ボールやビブスといった練習用具の管理は主務と呼ばれるチームマネージャーか新人選手たちが行なっていた。広報担当者はいたが、記者から直接かかってくる携帯電話で取材対応に追われていた選手も少なくなかった。プロフェッショナルな環境が 1990 年代までの韓国には整っていなかった。

そのため、1990 年代後半に日本にやって来た韓国人選手たちが J リーグの環境を高く評価したわけだが、2002 年ワールドカップ以降、韓国でもサッカー専用スタジアムが数多く新設され、K リーグのほとんどのクラブが天然芝のピッチやトレーニング施設を完備したクラブハウスを持つなど、サッカー・インフラが改善した。

それでも、サッカー環境という点では、J リーグのほうが優れているという韓国人選手は多い。2009 年時のインタビューでチョ・ジェジンもこんなことを言っている。

「サッカーをする環境面では、K リーグよりも J リーグのほうが整っていると感じます。K リーグは観客が少ないこともあり、プレーしていても楽しい気持ちになれないときもあった。サッカー選手なら誰もが観客の多いスタジアムで、大きな声援を浴びてプレーしたいと思うのではないのでしょうか」

熱気あふれるスタジアムでのプレーを渴望するのは選手として当然のことだが、K リーグと J リーグでは観客動員数でも大きな開きがある。参考までに K リーグと J リーグの 1 試合平均観客数の推移を調べてみたが、その差は一目でわかるだろう。

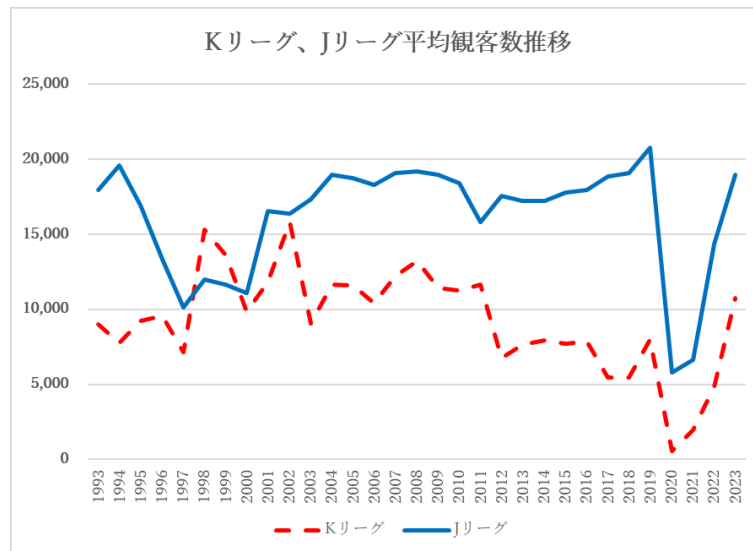


図 17 Kリーグ、Jリーグの1試合平均観客数の推移

Kリーグでは2012年から有料観客数のみ集計・発表しているが、その平均観客数は1万人にもならない。

近年はKリーグ人気も上々で2023年には有料観客数を集計して以降初めて年間300万人(301万1509人)・1試合平均1万人(1万733人)を突破したが、人気面を含めた「環境的要因」全般ではJリーグが優れているという意見が多い。

現役選手を対象にしたアンケート調査でも「環境的要因」を移籍動機に挙げる選手が圧倒的に多かった。

例えば大学在学中にFC東京のスカウトに目を留まり、大学を中退して2010年に来日したキム・ヨンゴン。Jリーグ移籍の決め手になったのは、大観衆でのプレーだったという。キム・ヨンゴンはJリーグで韓国代表に選ばれるまでに成長したあと、中国リーグで最強だった広州恒大に移籍して6年間プレー。高額年俸を稼いでいたが、2019年にガンバ大阪に復帰した。年俸では中国のほうが高額だったが、Jリーグのサッカー環境に惹かれて復帰したという。

2017年に柏レイソルにやってきたユン・ソギョンもJリーグ移籍理由として「環境的要因」を挙げていた。ユン・ソギョンはQPRでもプレーした元プレミアリーガーだ。サッカーの本場を知る彼も、「Jリーグはファンが本当に多い。ホームゲームは毎試合満員で、アウェーに行ってもサポーターが応援してくれる。それどころか練習場にも多くのファンが駆けつける」と驚きと喜びを隠さないほどだった。

このようにJリーグの人気や環境の良さは韓国人選手たちの間で広く認知されており、クォン・ギョウオンのように「ガンバから提案があったとき、ガンバ出身の韓国人選手に助言を求めたが、無条件に行くべきだとアドバイスを受けた」と、Jリーグの環境の良さをあらかじめ知った上で日本行きを決める選手がほとんどのようだ。

つまり、最近の韓国人選手たちは目先の利益よりも、自身が身を置くサッカー環境を重

視して J リーグを選んでいると考えられる。

第3項 プロ・リーグの規模の違いが影響していないか

そして、この「サッカー環境」を「サッカー・インフラ」と言い換えると、日本と韓国の違いはより鮮明になる。

以下の表 10 は 2023 年の K リーグと J リーグの規模(チーム数、選手数、球技専用競技場数)、経済力(リーグ収益、優勝賞金、テレビ放映権料)、人気(平均観客数)などを調査してまとめた統計データだ。

2023年度	チーム数	選手数	専用競技場	リーグ収益	優勝賞金	放映権料	平均観客数
Kリーグ	1部=12	418	10	約36億9,760万円	約5,500万円	約12億円	10,733人
	2部=13	442					
Jリーグ	1部=18	567	30	307億9,400万円	2億円	約217億円	18,993人
	2部=22	695					
	3部=20	596					
*リーグ収益はそれぞれの経営公示を参考							
*Jリーグ放映権料は11年2395億円を1年単位で計算							
*Kリーグ放映権料は110億ウォン報道を参考							

表 10 2023 年度の J リーグと K リーグの比較

何を重要視するかは意見が分かれるところだが、これらすべての要素を含めたものが「リーグの総合力」だとしたとき、J リーグと K リーグでは明らかに差があり、それが選手たちの移籍動機に少なからず影響していたことは、本研究での文献調査でもいくつか確認することができた。

Myung&Lee(2018)も韓国人選手の海外移籍要因を分析した論文の中で、イングランドでプレーしたアイルランド人サッカー選手 10 名の移籍動機を調査した Elliott(2016)の分析を参考にしながら、「アイルランド・プロサッカー市場はイングランドを含め周辺ヨーロッパ国と比べて劣悪なインフラ状態にあり、そうした環境的条件がアイルランド選手にとっては移住動機として作用した。この研究結果は K リーグ選手たちの海外移住の原因とも密接な関連がある」としている。

イングランドでプレーしたアイルランド人サッカー選手 10 名を対象に彼らの移籍動機を調査した Elliott(2016)は、アイルランド人選手がイングランド・プレミアリーグに移籍した要因として①アイルランド・リーグの劣悪環境、②キャリア開発への欲求、③地理的な近さ、④人的ネットワーク、⑤文化的類似性などを挙げているが、確かにこの研究結果は韓国人 J リーガーとも共通するところが多い。

地理的に近く食事や生活習慣など共通点が多い日本は、サッカー選手に限らず、韓国人にとっては最も身近な海外であるし、言語の違いこそあるが同じ東北アジア文化圏にあることもあって、ヨーロッパや南米よりも馴染みやすいと思われる。

また、多くの先輩たちがプレーしてきたので情報も多く、ネットワークもある。シーズンを通して活躍した選手も多いので成功をイメージしやすい。Ｊリーグでプロとしてのキャリアを積み、韓国代表になった選手も多く、パク・チソンのようにヨーロッパへのステップアップした選手もいる。

さらに言えば、アイルランド・リーグとイングランド・プレミアリーグの関係を、ＫリーグとＪリーグにそっくりそのまま当てはめることはできないが、ＫリーグとＪリーグではリーグとしての「総合力」で大きな開きがある。

Myung&Lee(2018)は「スポーツ労働移住は自国でのキャリア開発機会の不足と説明することができる。自国リーグおよび各クラブのインフラ条件と環境が、選手たちの海外移住条件のひとつとして考慮されている事項だ」としているが、ＫリーグとＪリーグの総合力の違いが韓国人選手たちのＪリーグ移籍動機に何らかの影響を与えていることは間違いないだろう。

第４項 「スキルアップ」を移籍動機に挙げる心理の根底にあるものは何か

さらに言えば、韓国人選手から見たＪリーグの魅力は、「環境」や「人気」だけではなく。Ｊリーグの「実力」の高さも、彼らを惹きつける要素になっていると考えられる。

Ｊリーグの「実力」とは、選手の技術力であり、チームとしては戦術なども含めた競技力全般のことだと定義づけることができるが、文献調査ではＪリーグの実力に対する韓国人Ｊリーガーたちの評価の変遷も確認することができた。

スキルアップがそれだ。文献調査でスキルアップの割合が第１期は５％、第２期は２０％、第３期２４％と着実に増えているが(前出の図⑫参照)、この変化が示唆するものは多い。

そもそも、サッカーの世界において韓国と日本はライバル関係にあり、実力面では長らく韓国優位が続き、１９９３年日韓定期戦直後には「永遠の格下」と言い放つメディアもあったほどだった。そのためノ・ジョンユンが１９９３年にサンフレッチェ広島入団が発表されたときには反対する声もあったと証言している。

「当時の日韓戦をやれば韓国のほうが圧倒的に強かったでしょ。ヨーロッパならともかく、なぜ日本に行くんだという意見もある意味、理解できた」

また、同じ時期にノ・ジョンユン以外にも韓国人選手のＪリーグ進出が噂されたこともあり、『東亜日報』ではこんな記事も報じられていた。

「賛否両論がある中で韓国選手の日本行きが続いており、注目されている。(中略)。前韓国代表のノ・ジョンユンに始まって火が付いた選手たちの日本行きについて、一部のサッカー人たちは国内サッカーの弱体化だけではなく、金に目がくらんで売られていく宜しくない仕打ちだと非難している」(『東亜日報』１９９３年１月２７日付け)

韓国よりもレベルの低い日本に行けば自国サッカーの弱体化にも繋がるとメディアも警鐘を鳴らしていたわけだ。

プロ・レベルにおいても日韓の実力差は明らかで、アジアサッカー連盟(AFC)が主催するアジアクラブ選手権(現在の AFC チャンピオンズリーグの前身)でも K リーグ勢の優勝回数が多く、直接対決でも K リーグ勢に軍配が上がっていた。コ・ジョンウンも文献調査した記事の中で言っていた。

「日本でかならず成功する自信はありました。失敗する理由はありませんでしたし、当時の日本サッカーはそれでもまだ韓国よりかは少しレベルが落ちると思っていましたから」

コ・ジョンウン自身も日韓戦やアジアクラブ選手権で日本サッカーと対戦して勝利していた。実際に戦って勝利した経験からそう言っていたのかもしれない。

だが、J リーグが始まると日韓の実力差は次第に縮まり、両国の実力は拮抗するようになった。それは A マッチ通算成績にも如実に表れた。通算成績では 42 勝 16 敗 23 分けと韓国に分があるが、J リーグが発足した以降の 30 年間(1993 年～2023 年)の通算成績は日本の 9 勝 9 敗 10 分けと、ほぼ互角になっているのだ。

	日時	結果	試合概要	開催地
1	1993年10月25日	○日本1-0韓国●	W杯最終予選	カタール・ドーハ
2	1994年10月11日	●日本2-3韓国○	アジア大会準々決勝	日本・広島
3	1995年2月21日	△日本1-1韓国△	ダイナスティ杯	香港
4	1995年2月26日	△日本2-2韓国△ (PK5-3)	ダイナスティ杯	香港
5	1997年5月21日	△日本1-1韓国△	親善試合	日本・東京
6	1997年9月28日	●日本1-2韓国○	W杯最終予選	日本・東京
7	1997年11月1日	○日本2-0韓国●	W杯最終予選	韓国・ソウル
8	1998年3月1日	○日本2-1韓国●	ダイナスティ杯	日本・横浜
9	1998年4月1日	●日本1-2韓国○	親善試合	韓国・ソウル
10	2000年4月26日	●日本0-1韓国○	親善試合	韓国・ソウル
11	2000年12月20日	△日本1-1韓国△	親善試合	日本・東京
12	2003年4月16日	○日本1-0韓国●	親善試合	韓国・ソウル
13	2003年5月31日	●日本0-1韓国○	親善試合	日本・東京
14	2003年12月10日	△日本0-0韓国△	東アジア選手権	日本・横浜
15	2005年8月6日	○日本1-0韓国●	東アジア選手権	韓国・大邱
16	2007年7月28日	△日本0-0韓国△ (PK5-6)	アジア杯3位決定戦	インドネシア
17	2008年2月23日	△日本1-1韓国△	東アジア選手権	中国・重慶
18	2010年2月14日	●日本1-3韓国○	東アジア選手権	日本・東京
19	2010年5月24日	●日本0-2韓国○	親善試合	日本・埼玉
20	2010年10月12日	△日本0-0韓国△	親善試合	韓国・ソウル
21	2011年1月25日	△日本2-2韓国△ (PK3-0)	アジア杯準決勝	カタール・ドーハ
22	2012年8月10日	○日本3-0韓国●	親善試合	日本・札幌
23	2013年7月28日	○日本2-1韓国●	東アジアカップ	韓国・ソウル
24	2015年8月5日	△日本1-1韓国△	東アジアカップ	中国・武漢
25	2017年12月16日	●日本1-4韓国○	E-1選手権	日本・東京
26	2019年12月18日	●日本0-1韓国○	E-1選手権	韓国・釜山
27	2021年3月25日	○日本3-0韓国●	親善試合	日本・横浜
28	2022年7月27日	○日本3-0韓国●	E-1選手権	日本・名古屋

表 11 Jリーグ発足以降の日韓戦成績

ACLの舞台においてもKリーグ勢の優勝6回に対し、Jリーグ勢は5回。ACLではグループリーグや決勝トーナメントで日韓対決が毎年のように行われているが、表11にもあるように直接対決でJリーグ勢がKリーグ勢を打ち負かすことも多くなった。

年度	規模			実力			年度	規模			実力		
	チーム数	選手数	外国人数	ACL成績	最高成績チーム	直接対決		チーム数	選手数	外国人数	ACL成績	最高成績チーム	直接対決
1993	6	172	13	不参加		不参加	2009	15	481	59	優勝	浦項	3勝2分5敗
	10	279	54	3位	V川崎			18	544	56	準決勝敗退	名古屋	5勝2分3敗
1994	7	209	23	準決勝敗退	一和天馬	1勝	2010	15	503	55	優勝	城南	4勝1分5敗
	12	346	58	準々決勝敗退	V川崎	1敗		18	528	61	R16敗退	G大阪、鹿島	5勝1分4敗
1995	8	242	24	優勝	一和天馬	1勝	2011	16	546	64	準優勝	全北現代	5勝3分4敗
	14	425	62	準々決勝敗退	V川崎	1敗		18	510	50	準々決勝敗退	C大阪	4勝3分5敗
1996	9	269	48				2012	16	544	66	優勝	蔚山	4勝3分2敗
	16	434	72					18	505	55	R16敗退	名古屋、柏	2勝3分4敗
1997	10	260	47	優勝	浦項	1勝1分	2013	14	455	53	準優勝	FCソウル	3勝4分2敗
	17	469	74	準々決勝敗退	横浜M	1分1敗		18	522	62	準決勝敗退	柏	2勝4分3敗
1998	10	248	32	優勝	浦項	1勝1分1敗	2014	12	395	44	準決勝敗退	FCソウル	4勝2分4敗
	18	498	85	準々決勝敗退	鹿島	1勝1分1敗		18	506	60	R16敗退	川崎F、広島、C大阪	4勝2分4敗
1999	10	312	31	準々決勝敗退	浦項、釜山	1分1敗	2015	12	408	52	準々決勝敗退	全北現代	6勝2分6敗
	16	471		優勝	磐田	1勝1分		18	528	54	準決勝敗退	G大阪	6勝2分6敗
2000	10	310	44	3位	水原三星	1分1敗	2016	12	401	47	優勝	全北現代	6勝2分2敗
	16	470		準優勝	磐田	1勝1分		18	535	60	R16敗退	FC東京、浦和	2勝2分6敗
2001	10	305	52	優勝	水原三星	1勝1敗	2017	12	399	49	R16敗退	済州	4勝1分5敗
	16	493		準優勝	磐田	1分1敗		18	570	68	優勝	浦和	5勝1分4敗
2002	10	296	56	優勝	水原三星	1勝1分	2018	12	417	50	準決勝敗退	水原三星	4勝2分4敗
	16	521		準々決勝敗退	鹿島	1分1敗		18	571	75	優勝	鹿島	4勝2分4敗
2003	12	404	60	GS敗退	大田、城南	2勝	2019	12	417	49	R16敗退	全北、蔚山	5勝1分4敗
	16	484		GS敗退	鹿島、清水	2敗		18	570	90	準優勝	浦和	4勝1分5敗
2004	13	403	68	準優勝	城南一和天馬	2勝2敗	2020	12	378	41	優勝	蔚山	4勝2分3敗
	16	497	45	GS敗退	磐田、横浜FM	2勝2敗		18	565	88	準決勝敗退	神戸	3勝2分4敗
2005	13	403	58	準決勝敗退	釜山	2勝	2021	12	414	50	準優勝	浦項	3勝3分4敗
	18	561	50	GS敗退	磐田、横浜FM	2敗		20	598	85	準々決勝敗退	名古屋	4勝3分3敗
2006	14	429	46	優勝	全北現代	3勝1分	2022	12	411	44	準決勝敗退	全北現代	4勝4分
	18	568	53	GS敗退	G大阪、東京V	1分3敗		18	555	84	優勝	浦和	4分4敗
2007	14	430	50	準決勝敗退	城南一和天馬	2分4敗	2023	12	418	49			4勝1分1敗
	18	569	56	優勝	浦和	4勝2分		18	567	87			1勝1分4敗
2008	14	448	53	GS敗退	浦項、全南	1分1敗	*上段がKリーグ、下段がJリーグ。						
	18	569	47	優勝	G大阪	1勝1分	*いずれも1部リーグによる比較。						

表 12 KリーグとJリーグの規模、ACL 日韓対決成績

そんなJリーグの強さや技術の高さをテレビ中継で見たり、実際に対戦して知ること、Jリーグに興味を持つ韓国入選手が出てきてもおかしくはない。文献調査でも以下のようなコメントも確認できた。

「1999年9月に日韓五輪代表の親善試合があったでしょ。あの試合後に日本サッカーを強く意識するようになったんです。子供の頃から“サッカーでは日本に負けるな”と言われて育ってきたから、連敗はかなりショックでしたし、悔しくもありました。けれど、それ以上に日本でプレーしてみたいという願望が沸き上がったんです。どうして日本サッカーは強いのか。韓国サッカーと何かどう違うのか。実際に体験してみたくなかったんです。だから、京都からオファーがあったときも迷わなかったし、単身でも来日にも不安はありませんでした」（パク・チソン/2000年～2002年/京都）

「以前から一度はJリーグでプレーしたいと思っていたので、その夢が叶ったことを素直に嬉しく思っています。ACLを制覇したガンバ大阪という強豪チームでプレーできることにとても満足しています。レベルの高い選手がたくさんいるので、多くの経験ができることを嬉しく思います」（パク・ドンヒョク/2009～2012年/ガンバ大阪、柏レイソルなど）

これらの言葉でもわかる通り、移籍動機で「スキルアップ」の割合が高くなっているのは、韓国人選手たちが日本サッカーの発展を認め評価し、Ｊリーグが「自分のスキルを上昇させてくれる場所」という期待があるからだと考えられる。

特に近年、日本サッカーの成長は著しい。韓国との直接対決だけではなく、ワールドカップやアジアカップといった国際大会でも韓国と同等、もしくはそれ以上の成績を残している。

大会名	韓国	日本
2000年アジア杯	3位	優勝
2002年W杯	4強	16強
2004年アジア杯	8強	優勝
2006年W杯	GL敗退	GL敗退
2007年アジア杯	3位	4位
2010年W杯	16強	16強
2011年アジア杯	3位	優勝
2014年W杯	GL敗退	GL敗退
2015年アジア杯	準優勝	8強
2018年W杯	GL敗退	16強
2019年アジア杯	8強	準優勝
2022年W杯	16強	16強

表 13 2000 年以降の主要国際大会の成績比較

2021 年にガンバ大阪にやって来たチュ・セジョンも、文献調査したインタビュー記事で言っていた。

「日本は若い頃からプレーしたい場所だった。お金重視なら中東や中国を選んだが、僕は金銭的なことよりも刺激と成長のためにＪリーグを選んだ。日本はミッドフィールドに良い選手が多い。基本技を重視し、精巧なパスなどを追求するサッカーだ。自分のスタイルを考えると、日本に行って競争すればもっといい選手になれると思う。日本の良い MF たちと競争して刺激を受けながら繊細さを磨きたい。日本サッカーを経験すれば自分のスキルはもっと精巧で正確になると思う」

当時チュ・セジョンは 31 歳。2018 年には韓国代表としてワールドカップにも出場した MF は、自身の技量を磨くためにＪリーグ移籍を決心したという。

この言葉でもわかる通り、韓国のサッカー選手たちにとってもはや日本サッカーは格下ではなくなった。格下どころか技術面では韓国よりも精巧だと感じている選手も多くいた。

移籍動機で「スキルアップ」の割合が高くなっているのは、韓国人選手たちが日本サッカーの発展を認め評価し、Ｊリーグが「自分のスキルを上昇させてくれる場所」という期待と認識あるからだと考えられる。

第5項 Jリーグへの「憧れ」を語った13歳の韓国少年

年俸や報酬を目当てにした海外移籍ではなく、「大観衆の前でプレーしたい」「レベルが高いステージに挑戦したい」「自分の技術と力量を高めたい」という理由でJリーグにやってくる選手が多いことは、文献調査を通じてよくわかった。

注目すべきは、そういった「憧れ」を抱いてJリーグを目指す選手が近年は低年齢化しているということだった。

その事例のひとつを紹介する。韓国のネットメディア『Oh My News』が2019年12月21日に報じた「日本で激賞された13歳(数え年)の韓国少年」という記事だ。

記事は、アビスパ福岡の練習に参加して激賞されたという当時小学6年生だったイ・ハンヒ君のインタビュー記事で、イ・ハンヒ君は「日本でプレーしたい理由は何か?」と聞かれてこう答えていた。

「韓国にも有名な選手が多いですが、特に日本にはヨーロッパで活動する選手が多いと聞いています。僕もヨーロッパでプレーするサッカー選手になるために一番良い舞台が日本だと思っており、日本の舞台に挑戦したいです」

Magree&Sugden(2002)は、サッカー選手の海外移動のパターンを「Pioneers パイオニア」「Settlers 移住開拓者」「Mercenaries 傭兵・報酬による雇用」「Nomadic cosmopolitans 定住しない放浪者」「Returnees 出国して帰国する人」の5タイプで分類したMaguire(1999)の研究をもとに、サッカー選手の海外移動にはより高いステージへの挑戦によって自身のキャリアを高めようとする「Ambitionist(願望型)」、自国の政情不安などで仕方なく母国以外でプレーしなければならない「Exile(亡命型)」、問題を起こして母国でプレーできなくなり海外に活躍の場を求めた「Expelled(追補型)」の3タイプも加わるとしている。

イ・ハンヒ君は小学生の時点で質の高いステージでキャリアを高めたいという「Ambitionist(願望型)」であり、自身が思い描く最終目標に近づくためにもJリーグに行きたい。このインタビュー記事から3年後、『Oh My News』は中学3年生になった彼にふたただ取材しているのだが、そこにはJリーグのアビスパ福岡のユースダイレクターとの記念写真とともにこんなコメントが紹介されていた。

「サッカーが上手な人たちを見ると国籍を問わず尊敬したくなります。Jリーグのユースクラブで何度か試合をしてみたら、明らかに日本サッカーのほうがレベルは高いという気がしてきました。現地でプレーする選手たちを尊敬するようになりました。僕もここで自分のキャリアを始めることができれば、後日、他のリーグに行ってもうまく頑張れるという自信も芽生えると思うので、最初の目標をJリーグにしました。(中略)ここでプロキャリアをスタートさせ、いつかヨーロッパという大きな舞台に進出し、韓国を代表する選手になりたいです」(『Oh My News』2022年10月26日「韓国サッカーの未来がJリーグで

プレーしたがる理由」)

小学生の頃から J リーグに憧れ、実力の高い日本でプロキャリアをさせて、将来はヨーロッパに進出して韓国を代表する選手に大成したい。そんなキャリアプランを描いて日本に来る選手は、イ・ハンヒ君だけではないと思われる。

そのひとつの根拠となるのが図 17。KFA が管理・把握している直近 10 年間の日本への国際移籍数である。

サッカー界では選手が海外に移籍する場合、「ITC (International Transfer Certificate) /国際移籍証明書」が必要となり、その発行と管理は各国 FA(サッカー協会)が行なっているが、KFA が直近 10 年に発行した日本チームへの移籍証明書の統計を見ると、小学校から大学までのアマチュア・レベルにおける国際移籍証明書の発行が 2016 年以降、増えているのだ。(図 16)。

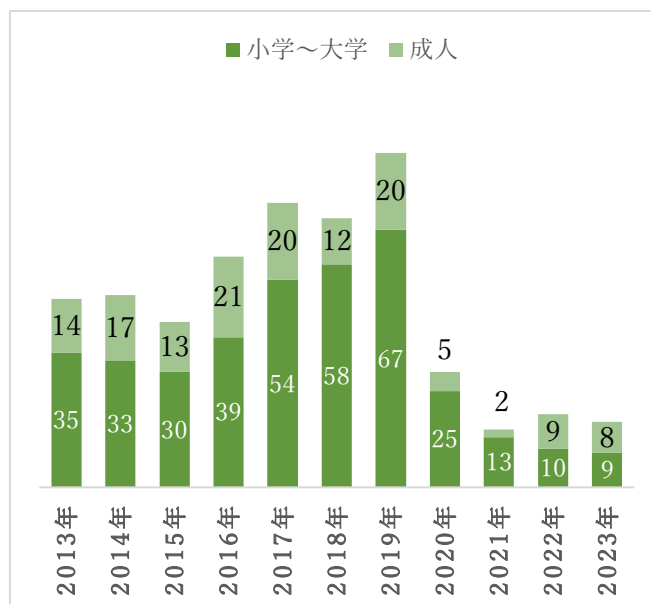


図 18 KFA が日本への国際移籍証明書を発行した選手数

詳しく細分化はされていないが、小学生～大学生といった学生レベルでの海外移籍が増加傾向にある事実が、示唆することは多い。前述したイ・ハンヒ君は 2019 年に小学 6 年生だったが、彼と同じような理由で J リーグを目指す選手も増えていると考えて良いだろう。

新型コロナウイルス感染症で海外渡航に制限があった 2020 年は急減したが、コロナ収束と時を合わせてふたたび回復傾向にもある。今や韓国人選手たちにとって J リーグは、10 代のアマチュア選手も意識し念頭に置く、有力な「海外移籍先」になっていると言える。

第5章 結論

Jリーグ30年の間に日本でプレーした韓国人Jリーガーは288名。当初は韓国代表経験者が多かったが、次第に若い選手が増加し、特に2009年のアジア枠導入以降は高校や大学からJリーグに来る選手が多かった。

30年間で149名がJリーグでプロになっていたということも明らかになった。30年間の統計を見ると10代～24歳の選手たちが70%を超え、2シーズン以上の在籍選手が65%というポジティブな統計もあったが、その一方で近年(2016年～2023年)はJ2・J3でプレーする選手が多く、在籍期間1年未満が46%という現実も明らかになった。

こうした特徴とともに本研究では文献調査、アンケート調査、メディアの報道内容を通じて韓国人Jリーガーの移籍動機について多角的に分析したが、その結果は次の通りだ。

韓国人Jリーガーたちの「移籍動機」は、初期こそ高年俵が最も期待され、それが大きなウェイトを占めていたが、2000年代後半からは「移籍動機」に変化があったのではないかと。現在、韓国人Jリーガーたちの「移籍動機」は大きく以下の三つの要素が絡み合っていると考えられる

①海外リーグ挑戦願望、②自国よりも優れた環境、③スキルアップおよびキャリア形成

もちろん、Jリーグへの移籍はプロ契約を交わしての海外移動となるので、選手たちは報酬や待遇などをまったく度外視しているわけではないが、KリーグとJリーグとの間にかつてのような年俵格差がなくなった現在、年俵がJリーグ移籍動機の核心となることも、最終的な決め手になっているわけではないようだ。

それでも韓国人選手がJリーグを選ぶのは、「サッカー選手として一度は海外リーグにしたい」という挑戦願望と、Kリーグよりも優れたサッカー環境での日々が自身のスキルアップとキャリア形成に大きく役立つと考えているからだろう。

ただ、近年は韓国でもヨーロッパ進出が増えており、トップ選手たちの移籍先もメディアの関心事も「ヨーロッパ進出」に集まるようになってきていることも事実だ。

韓国人選手の海外移籍先の統計を日本に限定せず、欧州などを含めた世界主要国にその範囲を広げてマクロ的な視点で俯瞰すると、移籍先としてJリーグが最も多いことには変わりはないが、その行く先は年を追うごとに多様化している。

図18は1993年から2023年までの30年間で、韓国人選手が海外移籍したプロ・リーグの年度別統計をまとめてグラフ化したものだ。

欧州5大リーグとはイングランドのプレミアリーグ、ドイツのブンデスリーガ、スペインのラ・リーガ、イタリアのセリエA、フランスのリーグ・アンを意味し、この統計数は各2部リーグ(イングランドの場合はEFLチャンピオンシップ)も含まれたものになるが、韓国人選手のヨーロッパ進出が確実に増えていることがわかる。

「欧2」にはオランダ、ベルギー、ポルトガル、トルコ、ロシア、オーストリアが含まれるが、その「欧2」にカウントしなかったチェコ、スイス、セルビア、デンマークなども含めると、2021年以降はJリーグよりも多くなる。

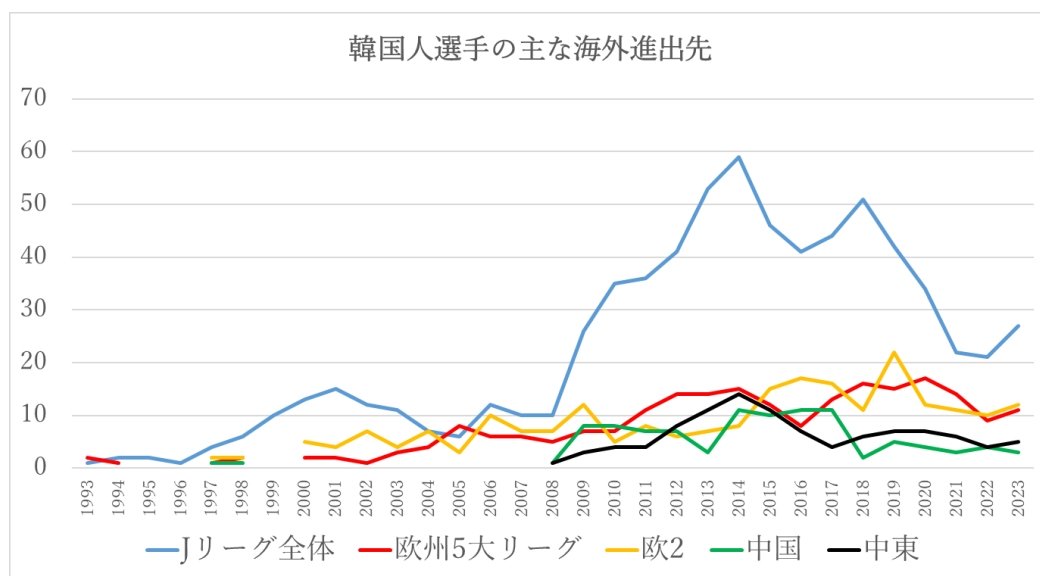


図 18 韓国人選手の主な海外移籍先

特に近年は韓国の高校を中退して10代の頃からドイツに留学して成功を収めたソン・フンミン(トッテナム)、小学校卒業とともに家族でスペイン移住してバレンシア下部組織で育ったイ・ガンイン(パリ・サンジェルマン)などの成功もあって、育成年代でヨーロッパに移籍する選手たちが増えていることもわかった。

年度	小学～大学	成人	小学～大学	成人	小学～大学	成人	小学～大学	成人
	ドイツ		日本		スペイン		タイ	
2019年	70	6	58	17	27	5	6	18
2020年	33	6	24	5	18	4	2	10
2021年	10	1	14	2	15	1		8
2022年	29	7	10	9	9		4	11
2023年	6	1	9	8	6		1	3
総数	169		156		85		63	

表 14 KFA が直近 5 年間に発行した国際移籍証明書発行国ベスト 4

KFA の選手登録管理チーム担当者によると、ドイツやスペインだけではなく、最近ではタイ、オーストラリア、クロアチア、ポルトガル、オーストリア、チェコなどに移籍する選手も増えているという。つまり、韓国人選手の海外移籍先の選択肢は多様化しているのだ。

そうした状況の中で、「韓国人選手にとっての J リーグ」は今後どのように変化していくか。韓国人 J リーガーたちは過去 30 年の実績から「計算できる戦力」として認知されており、さらなるグローバル化を進める J リーグにとっては今後も必要な人材だ。また、選手の海外移籍先の多様化が進む韓国サッカー界にとっても J リーグに移籍する韓国人選手たちの動向は注視していく必要があると思われる。(了)

第6章 補論 韓国人Jリーガーはなぜ増えたのか。その変遷と傾向

第1節 「裏切り者」から「愛国者」へ。そして2002年ワールドカップ効果

Jリーグにおいて今や欠かせない存在になりつつある韓国人選手たち。しかし、開幕元年の1993年にJリーグでプレーした韓国人選手はノ・ジョンユンただひとりだった。

高麗(コリョ)大学在学中に韓国代表入りを果たし、Kリーグを経ずにサンフレッチェ広島でプロになったノ・ジョンユンは文字通り、韓国人Jリーガーの「パイオニア」だったが、1993年当時、彼に突き付けられたのは「裏切り者」というレッテルだった。ノ・ジョンユンは言っている。

「私は純粋に、Jリーグで自分の力を試してみたかっただけだったのだが、一部の人々からすると、日本に行くことは国を裏切るように映ったんだろうね。裏切り者、売国奴と罵る人もいたから。だから、日本で失敗したらもう韓国には絶対帰れないだろうなと思った」

当時は日韓関係がかつてないほど陰悪な時代だった。教科書問題、領土問題などの政治的摩擦が韓国の対日感情を逆なでしていた。

ギャラップ・コリア社が成人1000人強を対象に1993年に実施した世論調査でも、「日本に好感を持っている」と答えたのは34%。逆に「好感を持てない」と答えたのは63%と多かった。

そんな時代だっただけに自分には「裏切り者」のレッテルも付いて回ったのではないかとノ・ジョンユンは語っている。

「韓国と日本の間にある歴史上の問題を考えれば、批判を受けことはある程度覚悟はできた。それに当時の日韓戦をやれば韓国のほうが圧倒的に強かったでしょ。ヨーロッパならともかく、なぜ日本に行くんだという意見もある程度、理解できた。でも、頭でわかっていても、気持ちはJリーグのほうに向いていたんだよ。(中略)Jリーグにはジーコ、リネカー、リトバルスキーという世界の超一流選手が集まることが決まっていたでしょ。私は純粋に、そこで自分の力を試してみたかった。そのようなチャンスはお金で買えるものではないから」

この言葉でもわかる通り、ノ・ジョンユンはサッカー選手としての挑戦心に突き動かされてJリーグにやって来たわけだが、「海外リーグ挑戦の最後のチャンス」だと受け止めJリーグに来た選手もいた。1997年にベルマーレ平塚にやってきたホン・ミョンボだ。文献調査したインタビュー記事でホン・ミョンボは言っている。

「1994年ワールドカップでドイツのクラブからの誘いもあったが条件面で折り合わずに移籍話は頓挫してしまった。しかも、年を重ねるごとに海外からの誘いも少なくなっていた。だからこそ、ベルマーレから誘いがあったときにはこれが最後のチャンスだと思い、チームを必死で説得した。韓国では優勝もMVPも勝ち取った。これ以上、韓国に残るのは辛いと」

本来ならばヨーロッパに行きたいが、それが叶わないならせめて海外リーグに挑戦したい。このような理由でJリーグに来た選手はホン・ミョンボだけではない。コ・ジョンウ

ン、ユ・サンチョル、キム・ドフン、チェ・ヨンスなど、第 1 期に来日した多くの選手たちがヨーロッパ進出の代わりに J リーグを選んだとしている。第 1 期の移籍動機で「次善の選択」が 3 番目に多いのも、そういった事情が影響したと思われる。

また、ホン・ミョンボは直接口にはしていないが、金銭的な部分も J リーグ進出を決意させた動機のひとつだろう。1995 年に K リーグ初の年俸 1 億ウォン突破を果たしたホン・ミョンボだが、1997 年のベルマーレ移籍時の年俸は 7 億 5000 万ウォンと報じられた。韓国で何年もプレーしてやっと稼げる大金が J リーグで手に入ったのだ。

ホン・ミョンボだけではない。多くの選手たちが K リーグ時代よりも多くの年俸を手にしたことを当時の韓国メディアが報じており、前出の『BIGKIND』による記事検索でも確認できた。中には「J リーグは韓国人選手のエル・ドラド(理想郷)だ」というタイトルで報じたスポーツ新聞もあった。

しかし、金銭的メリットがあったのは選手だけではなく、次の記事引用文が当時の韓国人 J リーガーたちの状況を示している。

「欧州のチームは、アジアの選手には移籍料を多く出しませんからね。私は海外に出るのが目標でしたが、球団としては何よりも移籍金なんですよ」(『Sports Graphic Number』1999 年 4/8 号「売国奴から愛国者への 6 年」より)

発言の主であるハ・ソクジュは 2000 年に J リーグ・セレッソ大阪に移籍しているが、韓国メディアの報道によると、ハ・ソクジュは移籍金 1 億円(約 9 億 4000 万ウォン)を所属クラブにもたらしていた。Myung&Lee(2018)は当時の韓国サッカー界の状況を次のように分析している。

「1983 年出航以降、K リーグのクラブたちは運営予算のほとんどを母体企業に依存していた。メインスポンサー締結と中継権、チケットおよび付帯施設収入などで自立的運営体制を備えた先進プロスポーツクラブとは異なり、K リーグのクラブたちは母体企業と地方自治体から運営予算を調達していた。そんな中で 1990 年代後半、韓国は IMF 金融危機下の政府、地方自治体、そして国内企業たちの財政的な厳しさが深刻な水準に達していた。当時の国家的 IMF 金融危機は、K リーグ・クラブたちの運営予算縮小に繋がるしかない構造的限界を持っていた。このような国家的な金融危機状況の中で、J リーグのクラブたちによる巨額年俸および移籍金の提示は、選手個人と K リーグ、さらには社会全般的に肯定的な現象をみなしたと解釈できる。K リーグ選手たちが海外に移籍することで発生した国内クラブの移籍料収入と選手個々の年俸収益は“外貨稼ぎ”として社会的な共感を得られたのだ」(『The Changes of Paradigm in Sport Labor Migration and Its Significance: Focused on Korean Footballers』)

「次善の選択」であっても叶えなかった海外進出願望と、選手だけではなくクラブにも発生した金銭的メリット。まさに選手とクラブの利害が一致したわけだ、この状況を大島(1999)は次のように表現している。

「海外に出ていくことは、外貨獲得の面からも奨励されるようになった。海外に出ていく

ことが多いサッカーは“孝子(孝行)種目”と呼ばれ、日本を含め海外からスカウトされて韓国を出ていく選手は、“もはや売国奴”ではなく“愛国者”になったのだ」

ただ、それだけでは 1990 年代後半から始まる韓国人選手の J リーグ移籍ラッシュはなかっただろう。ホン・ミョンボは、日本と韓国が共同開催した 2002 年ワールドカップもその決断を後押したと告白している。

「実は 1994 年ワールドカップ終了後にもベルマーレ平塚からオファーがあったが、そのときは丁重に断った。僕自身が J リーグよりもヨーロッパに興味を持っていたこともあるが、韓国の世論が僕の J リーグ進出に嫌悪を示したことも無関係ではない。一部のファンから嫌がらせの電話や移籍反対の血判書を突きつけられたりもした。当時の韓日関係は今ほど親密ではなく、どちらかというと険悪だった。両国は過去の歴史を引きずっていたし、ワールドカップ招致をめぐる熾烈な争いも繰り広げていた。ノ・ジョンユンなど日本でプレーする選手もいたが、韓国社会の受け止め方は否定的だった。そうした韓国の日本に対する見方を変えたのがワールドカップ共同開催だ。これによって韓日両国の歩み寄りのムードが高まり、心情的な距離も縮まっていった」(『LIBERO ホン・ミョンボ自伝』ホン・ミョンボ、2002)

ホン・ミョンボに続く形で 1998 年にヴィッセル神戸にやって来たキム・ドフンも言っている。

「2002 年ワールドカップが、韓国か日本のどちらかの単独開催だったらお互いにしこりが残って交流どころじゃなかったかもしれない。だが、共同開催になって韓国国内の日本に対する見方が変わった。1997 年ワールドカップ・アジア最終予選を覚えている？ ソウルで行われた韓日戦で“一緒にフランスに行こう”という横断幕が韓国サポーター席に掲げられたでしょ？ あれを見て時代は変わったこと、日本に行くなら今だと確信した。僕に続いた選手たちも思いは同じだと思う」(『With KOREA! ワールドカップ「成功」への道』慎武宏、2001)

かくして 1990 年後半から韓国人選手の J リーグ進出は増えたわけだが、韓国人 J リーガーの増加は日本サッカー界にも好影響を及ぼした。元日本代表のキャプテンである井原正巳も、ホン・ミョンボとの対談で言っている。

「韓国の選手たちが J リーグに来るようになってから互いを理解し合えるようになったし、切磋琢磨しながら一緒に強くなろうという気持ちがお互いに芽生え始めた時期だと思います。スタジアムに“一緒にフランスに行こう”という横断幕があった時はうれしかったですね。2002 年ワールドカップの共催が決まっていたことも関係していたと思いますが、一緒に手を組んでアジアサッカーを盛り上げていこうという雰囲気は、選手としても励みになりました」

韓国人 J リーガーが増加し始める頃、日本の朝日新聞と韓国の東亜日報が共同で実施している世論調査でも、両国関係は着実に良くなっている。

「日韓関係の展望変化」を問う設問に対して、ともに「肯定的」と答えた回答数が年を追

うごとに増えた。この関係改善に 2002 年ワールドカップの共催が寄与していたとすれば、韓国人 J リーガーたちも小さいながらもその一助になったと言えるだろう。

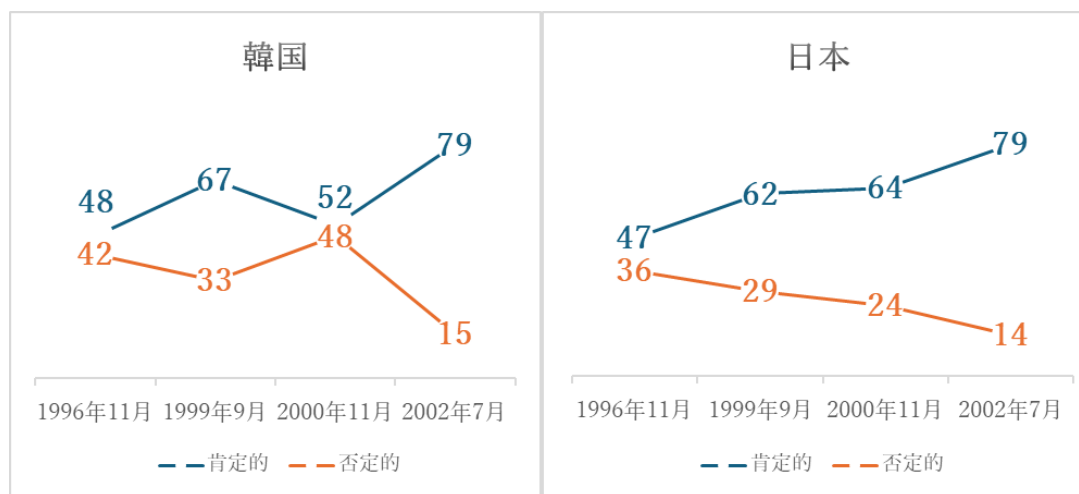


図 19 東亜日報・朝日新聞 共同世論調査 ワールドカップ共催決定後の日韓関係について

第 2 節 「J リーグ経由欧州行き」の始まりと「セカンドベスト」の現実

また、2002 年ワールドカップは日韓交流を活性化させただけでなく、韓国サッカー界にとっても大きな転換点となった。

韓国ではワールドカップ開催を機に、全国各地にサッカー専用スタジアムが建設され、K リーグのクラブも増加したのだ。まさに韓国サッカー界が渴望してきたインフラ改革だった。

選手たちの可能性も広がった。同大会で韓国代表はベスト 4 進出の快挙を成し遂げているが、その主力選手だったソン・ジョングク、キム・ナミル、イ・ヨンピョがオランダに、イ・ウルヨンがトルコに、イ・チョンスはスペインに、チャ・ドゥリがドイツにと、次々とヨーロッパへの移籍を実現させた。

その中には韓国人 J リーガーもいた。パク・チソンだ。1999 年 9 月の日韓五輪代表親善試合での大敗に衝撃を受け、「韓国と日本のサッカーの違いを体験したかった」という好奇心に動かされ、明知大学を休学して 2000 年に京都サンガ入りしたパク・チソンは、J リーグで成長して 2002 年ワールドカップで活躍。翌年にはオランダの PSV アイントホーフェンに移籍し、2005 年には世界的な名門マンチェスター・ユナイテッドにスカウトされる選手にまで成長した。文献調査した記事の中でパク・チソンは言っている。

「J リーグはプロキャリアをスタートさせた場所。僕のプロサッカー選手としての土台は日本にあります」

そして、2002 年以降、パク・チソンと同じようなサクセスストーリーを目標に掲げて日本に来る選手、特に若い選手の J リーグ移籍が増えていった。文献調査でも以下のようなコメントも散見された。

「日本で良い成績を出したい。チーム雰囲気や練習環境すべてに満足している。ここで活躍し、

2006 年ドイツ・ワールドカップ後にはイングランドに挑戦したい」(チョ・ジェジン/2004 年～2006 年、2009 年～2010 年/清水エスパルス、ガンバ大阪)

「J リーグで活躍し、ヨーロッパに進出したい。早く日本のサッカーに適應できるよう努力する」

(キム・ジンギユ/2005 年～2006 年/ジュビロ磐田)

第 2 期(2002 年～2008 年)は来日平均年齢が 21.87 歳と最も若く有望株も多かった時期だが、「目標とするのはヨーロッパであり、そのためのステップボードとして J リーグ選んだ」という選手が多かったことが、これらのコメントからも伺えるだろう。

もっとも、そのアプローチに拍手喝采が集まったわけでもなかった。2000 年代後半、韓国のこんな記事も報道されていた。

「これまで多くの有望株が J リーグ進出をする際、日本活動を足場に欧州に進出するという名分をつけた。しかし、K リーグからでも欧州進出できるだけに、今後はそのような理由が力を失うものと見られる」(インターネットメディア『OSEN』2007 年 1 月 23 日「イ・トングッ、ミドルズブラ行きの意味」)

これは 2007 年 1 月に K リーグからプレミアリーグに移籍したイ・ドングッに関連した記事内にあったセンテンスだが、この一文だけで当時の韓国メディアが若手選手の J リーグ進出についてあまり肯定的でなかったことがわかる。Myung&Lee(2018)も次のように指摘している。

「2002 年から 2013 年まで、国内プロサッカー選手たちの主要移住地はヨーロッパ国家だったということは特徴的だ。その内容的フレーム分析によれば、ヨーロッパ国家への移住に関連した報道内容は主に、“成功”“進出”“名誉”“夢の実現”“スター誕生”などのキーワードで形成された楽観的なフレームが支配的だった。日本への移住と関連した報道内容でも楽観的なフレームが支配的だったが、J リーグへの移住は主に“経済的利益”というキーワードが形成されていたことがヨーロッパとの差異点だろう。つまり、国内選手たちにとってヨーロッパ移住は年俸(個人所得)、移籍料(クラブ収益)などの経済的収益よりも、サッカー選手としての成功に大きな意味を置いており、さらには韓国サッカーの夢の実現と解釈できる」(『The Changes of Paradigm in Sport Labor Migration and Its Significance: Focused on Korean Footballers』より)

つまり、ヨーロッパ移籍こそが海外移籍の理想形にして王道であり、J リーグ移籍は「経済利益」を求めたものとみなさる傾向にあった。日本にやって来た韓国人 J リーガー選手たちが「J リーグ経由欧州行き」を大義名分のように口にしていたのは、そういった見方のせいでもあったと言えなくもないだろう。

ただ、実際に J リーグからヨーロッパに移籍した選手はさほど多くはない。J リーグでプレーした韓国人選手 288 名の所属先を調べた結果、横浜 F・マリノスからフランスに移籍した

アン・ジョンファン(2006 年)、横浜 FC からロシアに移籍したオ・ボムソク(2008 年)、ジュビロ磐田からスイスに移籍したパク・チュホ(2011 年)、セレッソ大阪からウェールズに移籍したキム・ボギョン(2012 年)、アルビレックス新潟からドイツに移籍したキム・ジンス(2014 年)、ガンバ大阪からフランスに移籍したファン・ウィジョ(2019 年)だけだった。

それだけに「J リーグ経由欧州行き」は簡単ではないと言えるが、今でも韓国人 J リーガーの中には「J リーグ経由欧州行き」を抱負に挙げる選手は多い。2019 年に FC 東京にやってきたナ・サンホは文献調査した記事の中で言葉は言っている。

「海外でプレーすることが目標だったです。異国の地に身を置くことでもっと強くなりたい、成長したかったんです。ヨーロッパ進出が最大の目標でしたが、諸事情でなかなか話もまとまらず。そんな中、熱心にオファーをくれたのが FC 東京でした。代表には J リーグでプレーする先輩も多く、いろいろ教えてもらいましたし、FC 東京には韓国人の先輩たちが面倒を見てくれるので助かっています」

選手としての憧れや究極的な目標はヨーロッパだが、それが叶わずとも一度は海外リーグを経験したい。日本なら地理的にも文化的にも近く、J リーグはこれまで多くの韓国人選手が活躍してきた。自分も適応もしやすいだろう。J リーグで成長できれば、ヨーロッパ進出の可能性も出て来るかもしれない。言うなれば、自分の願望と力量を天秤にかけたうえで決心したのが J リーグだったということだ。

ともすれば打算的にも映るが、したたかに自分の現実を直視したうえで決断した「セカンドベスト」でもあると言えるだろう。2000 年代後半はこうした考えを持って日本にやって来る韓国人選手が増えていく時期でもあった。

第 3 節 K リーグへの反発と J リーグでの現実

また、2000 年後半からは、高校や大学を卒業もくしは中退して J リーグにやって来る選手も急増していることにも、触れておかねばならないだろう。

J リーグでは 2009 年からアジア枠を採用しており、韓国人選手もその制度改変の影響を受けたのではないかということは考察した通りだが、高校や大学を卒業した選手たちが K リーグに行かず、J リーグを選んだ背景には当時の韓国側の事情もあったようだ。2010 年に大学を中退して J リーグにやったキム・ボギョンも文献調査した記事の中で言っている。「K リーグにはドラフトがあって自分が望むクラブに行けない。J リーグは高校のときから興味があったんです」

J リーグでは新人選手の獲得が自由競争になっているが、K リーグでは各クラブの戦力均等化と高騰する契約金・年俸を抑えるためにドラフト制度が何度か採用されてきた。

最初に導入されたのは 1988 年から 2001 年まで。その後「ドラフトはクラブの自律競争を妨害し、選手の職業選択の自由を侵害する」という理由で撤廃されが、自由契約制度に変更した途端、有力選手の争奪戦で契約金相場が高騰し、2006 年からふたたびドラフト制が復活した時期があった。

「一般指名制度(前年度の下位チームから希望選手を順に指名できるウェーバー方式のようなもの)」と「縁故指名制度(クラブが特定高校1校を選定し、その高校卒業生を優先的に3名まで指名できるもの)の2本立てで行われ、Kリーグでのプレーを希望する韓国人選手はかならずドラフトを通過しなければならなかった。

そしてこのドラフトの特徴としては、何位指名を受けるかによって契約期間と年俸が定められていたことだった。1位～6位までの指名を受けた選手の年俸は、6位2400万ウォンから1位5000万ウォンまで小刻みに定められ、契約年数も順位次第で1～5年までと制限が設けられた。該当順位圏に入らなかったもののクラブの指名を受けた選手に対しても、契約期間1年・基本給2000万ウォンと設定されていた。

また、ドラフト優先指名された選手が入団を拒否した場合には、5年間Kリーグでプレーすることができなくなり、二重契約(年俸のほか別途サポート)を結ぶことも禁止された。

このドラフト制度への拒否感から、KリーグではなくJリーグを選んだ選手は多いと考えられる。韓国メディアが報じた記事の中でもこんなものがあった。

「ホン・ミョンボ五輪代表監督は1月25日、サウジアラビア遠征に参加する21人の選手リストを発表した。GK2人を除いた19人の選手のうち、半分近い9人が日本のプロチームに所属している。タイで行われたキングスカップ・ノルウェー戦に先発出場した11人のうち、キム・ボギョン(セレッソ大阪)、ペク・ソンドン(ジュビロ磐田)、キム・ヨンゴン(大宮アルディージャ)、ハン・グギョン(湘南ベルマーレ)の4人がJリーガーだった。2012年シーズンを控えても9人(1月26日現在)の大学生有望株がJリーグに進出した。延世(ヨンセ)大学のシン・ジェフム監督はこの現象について、韓国プロサッカーの選手選抜システムが最大の理由だと指摘した。シン監督は“2006年からクラブの費用節減と戦力平準化を名分にして実施しているドラフトが大きな問題”と声を高めた。ドラフト制度は新人選手の最高年俸を5000万ウォンに制限し、契約金もなくした。そのため選手たちは“JリーグのほうがKリーグよりマシだ”と認識するようになった」(『中央日報』2012年1月27日「五輪代表の半分はKリーグの代わりにJリーグ」)

この記事でも報じているように、第3期(2009年～2015年)に大学卒業や大学を中退してJリーグにやって来る選手が多いのは、Kリーグ・ドラフト制度が関係していたのではないかと考えられるが、この時期にJリーグにやってきた若手選手は日本で厳しい現実とも戦わねばならなかった。『京郷新聞』が2009年10月29日に配信した「韓国を背負う若者たちよ、Jリーグに行くな」という記事の中でもこう報じている。

「高校、大学生だけではなく中学生も含め、毎年Jリーグに行く有望株が30名を超える。彼らの目標は高額年俸とヨーロッパ進出など大きく分けてふたつだ。だが、彼らのほとんどが日本でC契約を締結する。その程度ならKリーグで頑張って毎年のように年俸引き上げを受けたほうがいい。ヨーロッパ進出には日本が有利だが確実な根拠がない。ヨーロッパのクラブがアジア選手をスカウトする優先根拠はAマッチでの活躍なのだ。(中

略)。日本が韓国の有望株に関心を持つ理由は、安い年俸の割には技量があり使えるからだ。日本のクラブは安価で有望株を買って成長すれば売って移籍金を手にし、使い物になれば下部リーグに送って終わりだ」

止まらない有望株のＪリーグ進出ラッシュへの警鐘を鳴らす報道だが、あながち間違いではないだろう。事実、2010 年以降、Ｊリーグに来た若手選手の中には期待通りの成長と活躍を遂げられず、人知れず韓国に戻っていたケースも多いことがわかっている。

なお、Ｋリーグでは2013 年からドラフト制度を改変。自由選抜1 名とドラフト指名方式を混在させ、徐々に自由選抜選手の枠を増やししながら2015 年でドラフト制度を全面廃止し、2016 年からは新人選手の獲得をふたたび自由競争に戻した。一説によると、この制度改変は若手選手たちの国外流失を防ぐための処置であったとも言われている。

新来日する韓国人Ｊリーガー、特に10 代～24 歳の若い選手は第4 期(2016 年～2022 年)になると微減しているが、それはドラフト制度廃止でＫリーグを選ぶ選手が増えたことも関係しているかもしれない。

第4 節 韓国メディアが伝えたＪリーグ30 年の変化

その第4 期(2016 年～2023 年)は韓国人Ｊリーグの数が微減しているが、その一方で韓国人選手の移籍先として増え始めたのが中国、中東、中国、東南アジアなどだった。

それもＫリーグから直接行く選手だけではなく、中国にキム・ヨングォン、サウジアラビアにカク・テヒ、チャン・ヒヨンス、UAE にキム・ジョンウ、カタールにイ・ジョンズ、ハン・グギョン、チョ・ヨンチョル、イ・グノなど、Ｊリーグでレギュラーとして活躍していた選手たちも日本を離れていった。

その多くが韓国代表経験者でもあり、中にはワールドカップも出場したスター選手たちでもあったが、韓国メディアの見方は厳しかった。

「中国、中東行きのエクソダス、いつまで続くのか」(『マイデイリー』2015 年7 月11 日)「サッカー界に吹き荒れる“チャイナ・エクソダス”の風」(『毎日経済』2017 年7 月14 日)

「エクソダス(Exodus)」とは「国外脱出」「大量出国」という意味で、韓国ではネガティブに使われることが多いが、この言葉が使われたのは中国、中東、東南アジアへの移籍があまり評価されなかった表れでもあった。中東・中国に移籍した多くの選手が高額年俸や巨額の移籍金を得ているが、実力やサッカー環境で韓国よりも劣る移籍先だという判断から否定的な論調が多かったと考えられる。

Myung&Lee(2018)によれば、「ヨーロッパを選択した過去の世代とは異なり、多くの選手が中国、中東、東南アジアなど、リーグの競争力とは関係なく無差別的に移動している。(中略)多くのサッカー専門家たちは、ヨーロッパ進出ではなくアジア・リーグへの連鎖的移動は究極的には韓国代表の競技力低下にもつながる可能性がある」と展望している」という見方もあったようだ。

注目したいのは、同じ時期に韓国人 GK の J リーグ進出が相次いでいることである。ヴィッセル神戸のキム・スンギュ、セレッソ大阪のキム・ジンヒョン、鹿島アントラーズのクォン・スンテ、川崎フロンターレのチョン・ソンリョン、コンサドーレ札幌のク・ソンユンなど韓国代表クラス GK が、2015 年前後あたりからに続々と来日していた。

だが、それを「韓国人 GK エクソダス」と報じたメディアはなかった。むしろ「日本サッカーに吹く“GK の韓流”」（『毎日経済新聞』2016 年 12 月 6 日）「再び火が付いた韓国産 GK の日本行きラッシュ」（『中央日報』2022 年 12 月 19 日）などと、韓国人 GK の優秀性が J リーグでも評価されている証として歓迎しているような論調だった。

これは裏返せば、韓国メディアの J リーグに対する見方と評価がポジティブになった一例とも言える。

そもそも韓国メディアは J リーグに対して懐疑的なところがあった。「プロサッカー熱風、日本列島を強打」（『京郷新聞』1993 年 5 月 28 日）など、J リーグ誕生時から大々的に報じる一方で、ジーコ、リネカー、リトバルスキーら大物外国人の来日は「金で地球村のスターを呼んだ日本のプロサッカー“星たちの行進”」（『東亜日報』1993 年 2 月 26 日）と皮肉り、コ・ジョンウン、ホン・ミョンボ、ファン・ソンホンらが日本行きを決心した折にはスポーツ新聞などに「J リーグは韓国人選手のエル・ドラド」との見出しが躍って、K リーグよりも恵まれた金銭条件ばかりがクローズアップされるなど、J リーグを見つめる韓国メディアの目はどこか嫉妬じみでいた。

90 年代後半になると、J リーグを経験した選手たちの口から伝わるサッカー環境や若年層育成面の充実などを「韓国も見習わなければならない」という意見が増え始め、各種メディアでも「J リーグに心を開こう」（『東亜日報』1997 年 1 月 1 日）、「疾走する日本、J リーグの緻密なシステム」（『朝鮮日報』1999 年 4 月 23 日）などの特集も多く組まれたが、「それでも実力では K リーグが上」との認識が大多数を占めていた。

そんな韓国に J リーグの実力を認めさせたのが AFC アジア・チャンピオンズリーグ（ACL）だろう。プロクラブのアジア最強を決める同大会ではグループリーグから日韓のクラブが対決して数々の激闘を繰り広げてきた。とりわけ 2007 年 K 浦和レッズ、2008 年のガンバ大阪と続いた J リーグ勢の優勝は韓国メディアに強いインパクトを残した。

各種メディアでは「浦和が残した教訓」（『スポーツ京郷』2007 年 9 月 20 日）など、さまざまな形で記事や特集を組み、K リーグ各クラブも J リーグ・クラブの人気の秘密（地域密着運営など）とノウハウを探ろうと、わざわざ日本にまで足を運んで視察したほどで、筆者も K リーグ・クラブ関係者やメディアの視察に多く同行した。

K リーグも J リーグの百年構想を土台にした J リーグの観客動員策やファン・サービス、そしてその努力を学ぶ必要がある。そんな意見が声高に叫ばれるようになり、2014 年には『京郷新聞』が J リーグのクラブ代表たちを招いた『韓日サッカー産業交流フォーラム』がソウルで開かれたこともあった。

このような過程の中で韓国人選手の J リーグ移籍に対する見方も変わり、近年はネガテ

ィブな論調は見られない。むしろ「Ｊリーグからラブコール」「Ｊリーグに挑戦状」といった肯定的なキーワードに報じるメディアが増えていた。

これはメディアの間でもＪリーグと日本サッカーの実力が評価・認知されている証であり、それはこれからＪリーグ進出を目指す韓国人選手たちにとっても望ましい傾向だと言えるだろう。メディアの支持と関心は選手たちにとっても励みにもなるからだ。

第５節 韓国人Ｊリーガーの意義

本研究では文献調査を通じて韓国人Ｊリーガーたちの心情も確認することができた。宿命とライバルと言わせる関係ゆえにかつては対抗心むき出しで日本サッカーの前に立ち上がった韓国人選手たちだったが、Ｊリーグに対しては概ね好印象で「日本から学ぶべき点が多い」と語る選手たちが非常に多かった。

また、韓国人Ｊリーガーたちか日本人選手たちと切磋琢磨するだけではなく友情を育むエピソードも多く確認できた。

国際Ａマッチや各種年代のアジア予選などでは激しく勝負する日本と韓国の選手たちだが、Ｊリーグの現場ではさまざまな交流がたくさんあり、そこで芽生えた友情も多い。ときには日本人のチームメイトと、互いの悩みや相談事をざっくばらんに語り合う韓国人Ｊリーガーも多いという。Ｊリーグでの“共闘”が日本と韓国の選手たちの心情的距離を縮めてきたと言っても過言ではないだろう。

そして、その“共闘”を熱く見守るサポーターたちの大声援が、韓国人Ｊリーガーたちをさらに勇気づけてきたことを付け加えねばならないだろう。韓国人選手が属するクラブの試合では、客席に韓国国旗がはためくことも今では珍しいことではなくなった。日韓の間で政治衝突が起きてその関係がギクシャクしても、Ｊリーグの現場では太極旗がはためき、韓国人Ｊリーガーへのチャントや応援コールが鳴り響いている。

また、韓国人Ｊリーガーたちがチームにもたらす効果はピッチの中だけとは限らない。韓国人Ｊリーガーが所属するクラブでは韓国語講座を実施したり、試合会場で韓国料理を楽しめるスタジアムグルメを展開した事例が多い。Ｊリーグでは「シャレン」と呼ばれる社会連携活動に力を入れており、各クラブはそれぞれの地域で様々な社会貢献活動を展開しているが、韓国人Ｊリーガーたちもクラブ主導の文化交流や地域ボランティア活動に参加している。それによって彼らの日本への理解が深まり、サポーターや地域住民たちも韓国人Ｊリーガーを通じて韓国を知るキッカケにもなっている。

振り返れば、日韓関係を接近させた最初のキッカケを作ったのも、サッカーだった。2002年ワールドカップの共同開催で日韓交流がいつになく活発になり、ワールドカップ後に起きてブームや第４次ブームまで続いている韓流エンターテインメント人気などの文化交流も、サッカー界がリードした日韓交流という名の地ならしがあったからにほかならないだろう。

そして、その日韓サッカー交流の最前線に立ち続けてきたのが、ほかならぬ韓国人Ｊリ

ーガーたちでもあった。

先駆者ノ・ジョンユンの来日から 30 年。今や韓国人 J リーガーは、日本と韓国のサッカー界がともに共有できる歴史であり、記録であり、未来になった。これからも日韓サッカー交流の最前線に立ち続ける彼らの奮闘を応援したい。

謝辞

本研究を行なうにあたり、多くの皆様にお力添えをいただきました。皆様に深く感謝いたします。

担当教員である中村好男先生からは、多大なるご指導とご支援を受け賜りました。大学院での研究に挑戦したいという私の想いを受け止めてくださっただけでなく、入学後も様々な角度からご助言をいただき、これまで私が知らなかった新しい「知の世界」を広げてくださいました。誠にありがとうございました。そして、平田竹男先生からは問題意識の核心部分への道筋を示していただきました。世界のサッカーと国際情勢にも精通された平田先生のご指導がなかったら、完成度を高めることはできなかったと思います。また、副査の岡浩一朗先生からは講義を通じて気づきもいただきました。入試の際の面接試験でもお世話になりました先生方が、最後までご指導してくださったおかげで、本稿を完成することができました。心から深く感謝申し上げます。

いつもの確なアドバイスをくださった奥田文子先生や、中村ゼミで伴走してくださった松下尚道さん、大武聖さん、龍野頼子さんら先輩方、様々な授業でご教授いただき先生方にもお礼を申し上げます。そしてその有意義な時間とともにし、同じ机に並び座りながら学んだ中村ゼミの同期の皆さんと18期社会人修士の皆さんに、労いと感謝の言葉をお伝えします。皆さんとともに悩み苦しみ、互いに励まし楽しむことができたことを嬉しく思います。

本研究は韓国側の協力なしではありえませんでした。貴重なデータをたくさん預けてくださったKFA(大韓サッカー協会)とKリーグ関係者の方々はもちろん、何かと親身になって協力してくれたKFAのウィ・ウォンソク理事、FA PHOTOSのイ・ワンボク代表、漢陽大学のイ・ジョンソン教授とリュ・チョンさんにはお礼を申し上げます。また、現役選手のアンケート調査に協力してくれた『スポーツソウル』キム・ヨンイル記者、韓国報道記事調査に協力してくれた『中央日報』ソン・ジフン記者ら頼もしい後輩たちにも心から感謝します。

何よりも日本にやって来たすべての韓国人Jリーガーたちに、深く感謝します。日本にやってきた彼らがいたからこそ、この研究を進めることができました。今回の研究にあってもインタビューに応じてくれたホン・ミョンボ監督をはじめ、多くの韓国人Jリーガーたちが取材に応じてくれたからこそ、さまざまな「移籍動機」があることもわかりました。今回の研究では詳しく触れることができませんでしたが、韓国人Jリーガーたちを通じて韓国への理解を深めたというエピソードは多く、韓国では彼らを通じて日本サッカーの長所が伝わった部分もあります。日韓サッカー交流に寄与してきたすべての韓国人Jリーガーとその関係者の皆さんに、敬意と感謝を申し上げます。

最後に私が大学院に通うことを応援してくれた尹台祚先輩と矢柄亮一先輩、ご理解を頂いた職場の皆さんと友人たち、そして常に支えてくれた家族に心から感謝します。

誰よりも強く背中を押してくれた妻と、泣いて喜んでくれた父と母。学業の進め方についてアドバイスを惜しまなかったふたりの息子と、同じキャンパスで学ぶ楽しみも与えてくれた娘。これまでもそうだったように、今回も家族の励ましがあったからこそ頑張ることができました。

本研究で得た経験を活かし、日本と韓国、韓国と日本、両方の社会に貢献できるよう今後も精進することを約束して、結びの言葉といたします。ありがとうございました。

参考文献

- 大島裕史 (1999) 「「売国奴」から「愛国者」への 6 年。」, 『Sports Graphic Number』 1999 年 4 月 8 日号, 文藝春秋.
- 刈部謙一 (2002) 『盧廷潤 「裏切り者と呼ばれて」』, 河出書房新社.
- 金東賢 (2013) 「韓国ポータルメディアにおける対日ナショナリズム — 「ミニ韓日戦」を中心に」 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科スポーツ文化領域修士論文.
- 社団法人 韓国プロサッカー連盟 (2023) 『K LEAGUE Annual Report 2023』, HanulMplus.
- 慎武宏 (2001) 『WITH KOREA! ワールドカップ「成功」への道』, 廣済堂.
- 慎武宏 (2013) 「若き 3 人のコリアンはなぜ“イルボン”を選んだのか。」, 『Sports Graphic Number』 2013 年 6 月 13 日号, 文藝春秋.
- 慎武宏 (2015) 『イルボンはライバルか 韓国人 J リーガーたちの証言』, SPORTAL KOREA.
- 高橋義雄・佐々木泰 (2012) 「日本人スポーツ選手の海外移動とキャリア形成に関する一考察」, 『生涯学習・キャリア教育研究』 2012 年 8 号 pp.71-78, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属生涯学習・キャリア教育研究センター.
- 朴智星・慎武宏構成・金龍太訳 (2007) 『信じるチカラ バク・チソン自伝』, ランダムハウス講談社.
- 藤田智博 (2013) 「J リーグにおけるサッカー移民の特性と変化」, 『スポーツ社会学研究』 2013 年 21 巻 1 号, pp.101-110, 日本スポーツ社会学会.
- 洪明甫・慎武宏訳 (2002) 『LIBERO 洪明甫自伝』, 集英社.
- リュ・チョン (2013) 「ノ・ジョンユンからペク・ソンドンまで…コリアン J リーガーの足跡」, 『Footballist』, 2013 年 11 月 23 日, <https://www.footballist.co.kr/news/articleView.html?idxno=6435>, (2023 年 12 月 17 日閲覧).
- Elliott, R. (2016). Football's Irish exodus: Examining the factors influencing Irish player migration to English professional leagues. *International Review for the Sociology of Sport*, 51(2), 147-161.
- J, Magee J. and Sugden. (2002). The world at their feet: professional football and international labor migration. *Journal of Sport and Social Issues*, 26, 421-437.
- Lyengar, Simon. (1993). News Coverage of the Gulf Crisis and Public Opinion: A Study of Agenda-Setting, Priming, and Framing. *Communication Research*, Vol. 20, 365-383.
- Maguire J. (1999). Global Sport. Polity Press.
- Wangsung, Myung. and Esther, Lee. (2018). The Changes of Paradigm in Sport Labor Migration and Its Significance: Focused on Korean Footballers. *Korean Journal of Sport Studies*, No.57(5), p. 105-123.
- Wangsung, Myung. And Youngshin. Won. (2019). Korean footballers exodus and its factors: Player migration to China and the Middle East. *Korean Journal of Sport Science*,

No.1, p. 45-59.

『大韓サッカー協会公式サイト』 https://www.kfa.or.kr/archive/player_record.php , (2023 年 12 月 17 日閲覧) .

『J.League Date Site』 <https://data.j-league.or.jp/SFTP01/> , (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『韓国人の日本に対する好感度調査 19991-2022』 Gallup Korea、韓国ギャラップ調査研究所(2022) <https://www.gallup.co.kr/gallupdb/reportContent.asp?seqNo=1316> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『日韓共同世論調査』 朝日新聞・東亜日報による共同世論調査 (2002) <https://www.donga.com/news/article/all/20020705/7839805/1> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『朝日新聞』(日本) https://www.asahi.com/?iref=pc_gnavi (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『日刊スポーツ』(日本) <https://www.nikkansports.com/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『イルガン・スポーツ』(韓国) <https://isplus.com/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『韓国日報』(韓国) <https://www.hankookilbo.com/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『京仁日報』(韓国) <http://www.kyeongin.com/main/index.php> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『京郷新聞』(韓国) <https://www.khan.co.kr/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『国民日報』(韓国) <https://www.kmib.co.kr/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『スポーツ京郷』(韓国) <https://sports.khan.co.kr/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『スポーツソウル』(韓国) <https://www.sportsseoul.com/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『スポーツ朝鮮』(韓国) <https://sports.chosun.com/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『ソウル新聞』(韓国) <https://www.seoul.co.kr/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『中央日報』(韓国) <https://www.joongang.co.kr/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『朝鮮日報』(韓国) <https://www.chosun.com/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『東亜日報』(韓国) <https://www.donga.com/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『釜山日報』(韓国) <https://www.busan.com/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『毎日経済新聞』(韓国) <https://www.mk.co.kr/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『BEST ELEVEN』(韓国) <https://www.besteleven.com/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『My Daily』(韓国) <https://mydaily.co.kr/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『Oh My News』(韓国) <https://www.ohmynews.com/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)

『OSEN』(韓国) <https://www.osen.co.kr/> (2023 年 12 月 17 日閲覧)